望月清司先生追悼

「望月清司・人と思想」

村上　俊介

はじめに

望月清司先生が 2023 年 2 月 1 日、亡くなった。享年 93 歳。現役時代は専修大学学長、学部長、社会科学研究所事務局長として、専修大学に貢献された。

1973 年に専修大学大学院に入学し、望月ゼミに入った私は、望月先生が初めて持つ大学院生だった。地方の大学にいた私は、学部学生の終わり頃に『講座マルクス主義　８資本主義』(1970 年、日本評論社）で先生の分担された「第一章　マルクス歴史理論における「資本主義」」をよく分からないながら読んでいて、その方が専修大学におられることを知っていた。先生はその時 43 歳、地方の学生も知っているほどにすでに気鋭の研究者として活躍されていた。この 1973 年は先生の主著『マルクス歴史理論の研究』（岩波書店）が刊行される年でもあった。

大学院ゼミの１年目、マルクス『資本主義的生産様式に先行する諸形態』のドイツ語テキストを読むことが中心で、その後『マルクス歴史理論の研究』がテキストになった。それとは別に院生は個別に先生の研究室に行き論文の個人指導も受けた。論文のコンセプトを説明したのち、一応出来上がったものを持って研究室にうかがうと、その後、原稿は赤、青、黒、緑のボールペンやマジックでズタズタになって戻ってきた。それを数度繰り返して、元の原稿枚数の 3 分の 2 ほどになって指導は終了。その頃の原稿は今でも大切に保存している。そこまで指導してくれる指導教授は少なかったのではないだろうか。もっともこうした指導は、こちらが構想を相談する段階では、その着想を褒めてくれるだけなので、原稿という現物を持っていかない限り、指導はそこまでということになる。「ともかく書け。論文というモノを介してでないと、知らない人は君のことを判断できない」というのが先生から何度かいただいたアドバイスであった。ドイツの都市のどこにもある郷土史博物館で、手工業者が修業過程で修得した技術を全てつぎ込んだ小さな上着

1970 年代後半（左は筆者）

や小さな家具の親方試験作品（Meisterstück, masterpiece）を見る時、よく大学院「修業」時代のズタズタになった原稿のことを思ったものだ。

望月先生は 1982 年から 1998 年まで学部長、学長の職にあり、研究活動に費やす時間が激減した。ちょうど私が教員になった時期に当たるのだが、こちらも遠慮して直接研究上の指導を受けることはできなくなった。1999年、先生が専修大学を退職されたのを機に、やっとそういう機会を持つことが可能になった。さっそく大学院時代に先生の下で学び、その後大学教員となった友人たち（石塚良次氏、鈴木章俊氏、杉谷克芳氏、高橋誠氏、村上）に加え、内田弘氏にも参加してもらい通称「望月研究会」を開くことにした。研究会では望月市民社会論について先生を交えた共著刊行を念頭に、その中に「座談会」も組み入れたいと思っていた。しかし2000　年に奥様が他界され、座談会だけでなく研究会そのものも開ける状況ではなくなってしまい、それらの計画は立ち消えとなった。私自身は「望月研究会」に各自持ち寄ることになっていた論文執筆作業をそのまま進めて、「望月市民社会論の累重的形成」（『専修経済学論集』第35 巻第 1 号、2000.7.）を書いた。

私はその後、先生のご自宅に年に何回かうかがい、通常はメールでやりとりをしていた。そのメール交換が急激に増える時期が二回あった。一度目は 2009－11 年、二度目は 2017－18 年である。2009 年から 11 年は私が聞き手となって「望月清司先生に聞く」（『専修大学社会科学研究所月報』No.574）を刊行し、それと重なるようにして先生が清華大学と南京大学の招待による講演のため中国に赴かれ、それに私も同行した時期であった。二度目の 2017－18 年は、先生の論文「価値形態論の上着は 30 万円」（『専修大学社会科学月報』No.664、2018 年 10 月）が発表される前後である。この論文はすでに 2009 年に私が預かっていたものであり、それまで何度も発表を勧めた結果、やっと専修大学社会科学研究所月報への刊行が実現された。これらの時期は先生のご自宅にうかがう頻度も高く、メールのやりとりも格段に多かった。先生のメールはいつも長文であった。そこには先生の子供の頃の想い出、あるいは市民社会論や現代社会への想いが多様に書き込まれている。それらは上記「望月清司先生に聞く」の作成過程で大幅にカットされた部分と重なるものも多かった。

この時期を中心にした、膨大なメール、あるいは「望月清司先生に聞く」の録音でカットされた部分が手元に残された。それらをそのまま埋もれたままにするのは、残念なことであるとずっと思っていた。録音のカット部分は、先生のご意思でなされたものであり、メールの方は私信である。前者には私の発言も多く含まれるので、公けにしたいという私の判断も許される余地があると思う。後者の場合、私信ではあっても「書簡集」という形式は一般に認められたものであり、先生の思想の一端を知る上で、残されたメールを「書簡」として、しかし節度を持って取り扱うことも認められるのではないか。ご遺族にもここで取り上げる素材を、事前に

一度見ていただいた。

本稿は望月清司先生の前半生と研究者としての後半生を振り返りながら、「人と思想」の一端を明らかにするために、「望月清司先生に聞く」に収録されなかったインタビュー原稿と、膨大な先生のメールの一部を材とする。望月清司先生の人物像を、その思想と共に振り返るための一助としてそれらを用いることにご理解いただきたい。なお、以下では敬称を略す。

Ⅰ．望月清司の少年期・青年期

Ⅰ-1. 旧制東京高校から「焼け跡闇市」へ

1929 年生まれ

1936 年 4 月　桃園第三小学校入学

1942 年 3 月　小学校卒業

1942 年 4 月　東京高校（尋常科）入学

1946 年 3 月　東京高校（尋常科）終了、そのまま東京高校（高等科）へ

1947 年頃　　休学届け提出（肺浸潤）

1949 年 4 月から復学－1949 年 5 月に東京高校消滅－大学進学断念

1929（昭和 4）年、望月清司は「多摩郡吉祥寺町の南端、井の頭公園の池が東へ神田川として流れ出すところにあった、旧鉄道省官舎」で生まれた。父親は名古屋出身で鉄道省勤務の技官、母親は静岡（興津）出身で、当時小学校教員をしていた。5 人兄弟妹の長男だった。彼が 3 歳の頃、「北多摩郡中野町へ引っ越し、東京市が東京都になり、中野町が中野区になって、最初の引っ越し先の近くに両親が建てた新居に移った。」(2017.10.3.：メールの日付、以下同様)。中野に家を建てた自宅の土地は借地だった。借地の上に家を建てるというのは当時は別に特別のことではなかったという。しかしそのせいで、後に空襲で家が焼失したとき、望月家はすべてを失うことになる。母親は教育熱心で、長男の清司を旧制東京高校尋常科に入れた。母親は静岡県興津が実家だったので、毎年夏休みには興津によく帰省した。まもなく望月は桃園第三小学校に入学。1936（昭和 11）年のことである。

「小学校は「桃園第三」だ。母は中野区の小学校のランキングを手に取るようにわかっていたから、自分の勤める「桃四」でなく、遠いのを承知で「桃三」に通わせたのだ」(2017.10.5.)。「当時、中学進学率では中野区のトップクラスが、中野駅の南にあった桃園第三小で、子供の足で片道 40 分はかかったが、そこへ通わされた。…そんな遠くから通うのは、ぼく一人で、学

校の近くですぐ友達みんなと別れてとぼとぼ歩く通学路の途中に映画館があった。ガラス窓に飾られているスチール写真を飽かず眺めたものだ。母は、たぶん半ばは自分の名誉心で、ぼくをそんな遠くに通わせる罪障感からか、たまにぼくが「映画見たい」というと、お小遣いをくれた。ぼくが見るのは、チャンバラ映画やエノケン映画でないことを知っていたから」（2012.4.13.）。

望月は母親の期待に応えた。1942（昭和 17）年、（旧制）東京高校尋常科に入学。桃園第三小学校がいかに進学校とはいえ、東京高校へ入学するのは 1〜2 人、望月の学年で 4 人だったそうで、彼がいかに優秀だったか分かる。当時の旧学制は複雑で尋常小学校卒業後は複数の進学コースがあった。旧制東京高校の場合、尋常科 4 年、高等科 3 年で、在学生の 90%超が東京大学に進学したという。

この前年末、日本は太平洋戦争に突入していた。すでに 1931 年以来、中国侵略を本格化していた日本国内の教育は著しく非合理・反動的なものになっていた。望月の東京高校尋常科のレベルの高い教育内容を聞いていると、巷で非合理な「臣民」教育を行なう一方で、それと隔絶したところで国家にとって必要・有用な人材養成は別途しっかり行なっていたという印象を持つ。また、学生の方も、その驚くほど合理的かつ高水準の教育を吸収しうる多才な人材が集っていたようだ。望月は、尋常科で受けた教育や同級生のことを、貴重な思い出として懐かしく語る。

「（ある同窓生の）おやじは、戦時中も出していた The Japan Times の幹部で、スタンフォード大学卒だ。で、英語の時間でも、それを知っている教師が、英米語のスペルと発音の違いを教えてくれたが、時々、「〇〇くん、これでいいかね」と聞いていた。もちろん、この「生徒」の父親の職業を知っていて、だ。当時の英語教科書は大正時代から「正統の英語教科書」として使われていた King’s Crown Reader というヤツで、もちろんアメリカ英語なんて、流れ者の英語扱いだから、このやりとりは、先生の口調まで覚えている。〇〇は「それでいいです」なんて答えていた。…（この）英語の教師は、イェスペルセンの『言語学講義』という分厚い本を翻訳していた。そんなことは、おくびにも出さない物静かな先生だったが。」（2017.9.8.）

「こう書いているうちに、当時の東高尋常科の教育水準の高さのことを、いろいろ思い出した。「米英撃滅、一億一心 火の玉だ」という時代、普通の中学では英語の時間が当たり前のように軽視または縮小されていたが、この尋常科では「第二英語」の時間まであった。何学年だったか忘れたが、『聖書英語』を教わった。三人称が、thy, thee, thou という「ジェイムズ一世欽定

英語」だ。そこで、「空の鳥を見よ。蒔かず、刈らず、蔵に収めもしない。それでも天の父は鳥を養ってくださる」という一文が頭に残った。当時は知らなかった「マタイ伝」の一節だった。驚くだろう。原文は先生が黒板に書き、それを写した。教員室には配属将校も居たし。

後年、「新共同訳」(「共同」というのは、カトリックとプロテスタント両派の聖書学者が＜共同で＞訳した、読みやすい版）で、一時かなりのめりこんで読んだが、そのうち、びっくりする事態に。新約では、三福音書は、マタイ・マルコ・ルカの順に編纂されているが、研究によれば三福音書の順序は、ルカ→マルコ→マタイの順らしい。読んでいるうち、ルカ福音書では、なんと「空の烏（からす）を見なさい」だった。驚いて原語を調べると、普通の烏 crow でなく、大型で凶暴な raven だったのだ。可愛い小鳥どころか、憎々しく危険な烏だ。こっちの方が、「そんなヤバい烏にも神の愛は及ぶ」の意味が伝わってくる。学長の時、私大連盟機関誌『大学時報』の巻頭言を書くよう頼まれたことがあって、「思い込みは危ない」という趣旨の短文を寄せたことがある。」(2017.9.10.)

「この授業で、先生の指名で綺麗な発音で読んだ級友がいた。おやじが外国航路の船長で、彼も語学好きだった。言語学をかじっていたらしく（彼も水泳部)、これも雑談中、日本語のラリルレロの冒頭子音は、R でも L でもなく、R を逆さまに書いた符号で表すんだよ、と教わった。彼はフランス語もかじっていて、クラスの他の二人（一人は当時の東大国史学科の教授、平泉澄（ちょう）の息子だった）と休み時間にフランス語でしゃべっていた。この三人は「気取っている」というので、クラスの中では浮いてたな。言語学の方は後年読売の記者になって、ゲッティンゲンにいた時、ちょうどボン特派員でいたので遊びに行ったことがある。もう一人は、のち国連大使になった。」(2017.9.10.)

「三年生になったとき、のーんびりした風貌の持ち主が「ドッペってきた」。「ドッペる」とは「落第する」という意味だ。高等科の学生と部活動なんかでいっしょになるから、ドイツ語の「リーベ」とか「メッチェン」などの言葉が尋常科でも使われる。数学が天才的にできない、というわけだったが、国語では抜群の天才で、４年生のとき、先生の推薦で、岩波の雑誌『文学』に論文が掲載された。そんな人間も、数学がダメだと当たり前のようにドッペる。のち「万葉集」の研究で京大教授になった。愛用の『岩波古語辞典』の編者の一人。

その彼に、才能を見込んで特別指導をしていた国語の先生は、二年生の時に新任で来たのだが、最初の教壇で「ご挨拶がわりに」と、目をつぶり首を振りながら『平家物語』の一節を朗読してくれた。朗々と語り継ぐその話にクラス一同しんとして声もない。「黒き馬のたくましうに、金覆輪の鞍を置き…」という一節だったが、わけもわからず「キンプクリン」という一度

聞いたら忘れられない奇妙な言葉だけが、強烈に頭に刻まれた。定年後、『平家物語』にのめりこんだのは、この先生の声が耳に刻まれたからだ。」(2017.9.10.)

「クロカン（黒田寛一）は尋常科で同級だった黒田の兄貴で、一年上だったがドッペって、隣の組にいた。当時 40 人ずつのＡ組とＢ組があって、一年ごとにメンバーの入れ替えがあったが、さすがの配慮で、二人は同クラスにはならなかった。…彼は絵画部員。年一回の「東高祭」には、弟ともども、油絵を出品していた。兄弟の登山姿を描いた大判の絵だ。「祭」に来る父兄向けに、二、三種類の絵はがきを売っていたが、その挿し絵はクロカン作だった。…クロカンはその後、年に一回ぐらい、深夜に電話をかけてきた。地獄の底からゾーと「よう、モッチャン（僕への呼び名）」と語りかける口調で。…（彼は）二人も「本読み秘書」を抱えていて、『思想』や『現代の理論』など綿密に読んでいた。その感想を言ってくるのだ。明日（と言うより、その日）に授業や会議があるのだが、その事は言わず、お説教を「ハイハイ」と聴いていた。「今、どこに」なんて聴いたことはない。」(2017.9.10.)

しかしそうした世と隔絶したような自由主義的な東高の学内にも、戦局の悪化と共に軍国主義の波は当然押し寄せてきた。

「戦争の激化とともに、自由な東高にも軍国主義の気配が色濃くなった。普通の教師は苦々しく思っていたに違いないが、その風潮を鼓吹したのが、配属将校と体育教師と「作業」教師の三人。「作業」とは、大成寮の食材をまかなうために、学校から少し離れたところに農場を設け、主として野菜を栽培していた。肥料は大成寮の「産物」で、「それ」を汲んだ桶をリヤカーで運ぶ。

その農作業を指導する「教師（果たして教員資格を持っていたかどうか）。この三人とも失礼ながら「河馬」を想わせる。それで、ひそかに「軍カバ・体カバ、作業カバ」と呼んでいた。毎月８日は、開戦を記念する「大詔奉戴日」で、朝礼に「海行かば」を歌うようになった。朝礼台に立った得意満面の体育教師のタクトで。高等科・尋常科の生徒が斉唱するわけだが、誰が始めたとも知れず、「海行カバ」、「水漬くカバね」、「山行カバ」、「草むすカバね」という歌詞のうち、「カバ」のところだけ大声で歌うようになった。この鬱憤晴らしは楽しかったが、二、三回続いたのち、「不真面目だ」というので、「高等科代表、尋常科代表、三歩前へ」で、ひどく殴られた。その時の尋常科代表が網野善彦。眉目秀麗の頬が真っ赤になった。」(2017.9.10.)

網野は望月の 2 年先輩になる。佐野眞一『人を覗（み）にいく』(2002 年、筑摩書房）によ

ると、網野善彦が「現在、東大の附属高校がある幡ヶ谷近くの東京高校に進んだのは、太平洋戦争が開戦する一年前の四〇（昭和一五）年のことだった。東京高校は七年制の学校で、都内屈指の進学校として知られていた。『あの学校はわりに自由な雰囲気があったんです。ところが入学した年か翌年にきた文部省送りこみの校長が、東京高校はどうもたるんでいる、自由主義的でけしからんということで、反動的にひどくなっていった』。…『「日本」とは何か』のなかにも、東京高校時代の厭戦気分が書かれています。しかし、網野さんからちょっと年上（24 年生まれ）の吉本隆明は、軍国少年として戦時下をおくっている。あの時代は、ちょっとした年齢差が、好戦と厭戦の差になったんでしょうか。『いや、というより、東京みたいなところとそうじゃないといころで戦争をみていたというのは、相当違うかも知れませんよ。…』」(155 頁)、とのことである。

「そんな尋常科生活は、四年生の時の「学徒動員」で、日立亀有工場に通うことになって一変した。授業は週に一日、時に二日だけになった。…　巨大な軍需工場だったから、当然米軍の目標になっていいはずだったが、そのころはもう、夜間の住宅地への焼夷弾攻撃に戦略が移っていたから、空襲のおそれはほとんどなかった。」(2017.9.10.)

「5 月 25 日の東京西部大空襲で、我が家も東高も焼け、生活は一変。恐怖の一夜が明けて、東高を見にいったら（「東高生で学校に一番近くに住んでる」と言われてた)、プールには近くの住宅地から敷地に逃げ込んだ避難者の焼け焦げた死体がびっしり浮かんでいた。熟視に耐えず、すぐにプールを離れた」(2017.9.10.)。

1945 年に入ると日本の各都市はアメリカ軍の空襲に見舞われた。東京大空襲は 3 月より始まる。望月家のあった中野町への空襲は 1945 年 5 月下旬、5 回目の東京大空襲によるものだった。望月が 16 歳になったばかりの頃だった。そのとき、母親は教員として児童とともに疎開先の長野県伊那に、弟妹は長野に疎開、中野に残っていたのは父親と望月清司のみ。この空襲によって自宅は、敷地内に所有するアパートと共に焼失してしまった。土地を持たない望月家では財産であった上物の家が焼失すると、文字通り「着の身着のまま」、何も残らなかった。

「昨日（これを書いているのは、その翌日 8 分過ぎだが）は、「東京西部大空襲」の日だった。母親は小学校の先生だったから、生徒を率いて長野県伊那に疎開、五人兄弟妹のうち、私だけが父親と、今の中野区多田町の自宅に暮らしていた。深夜の空、B29 の大集団が「ウォンウォン」という低い響きを重ねて襲来。数時間後、自宅を含む一体は火の海になった。燃え落ちる

家を、父とともに、ぶるぶると震えながら茫然と眺めていた。あれから 73 年…。」(2018.5.26.)

Ⅰ-2. 戦後の「焼け跡闇市」派として

そして 1945 年 8 月 15 日。

「母の弟にあたる叔父が…社用で名古屋へ出張にゆく列車中、米軍戦闘機による機銃掃射で死んだ。教師の母親は学童疎開で長野県の伊那にいたが、僕に葬儀に出てくれと言うので、亀有の日立工場に動員されていた僕は、許可をもらって興津へ行った。…その葬儀が終わったまま、ずる滞在していたとき、あの 8 月 15 日を興津で迎えたのだ。嗚呼。」(2018.9.8.)

望月清司 16 歳、旧制東京高校尋常科 4 年の時だった。翌 1946 年、望月は同校高等科に進級。

「高等科（文科甲類）に進んだが、校舎は焼け、もぬけの殻だから、当時の一高（今の東大駒場）に仮住まい。…甲類は英語専攻だったが、このころ第二専攻のドイツ語の授業が面白かったのだ。ドイツ語専攻は乙類（通称文乙）という。この時、ロシア語も少しかじった。いまでもソ連国歌はそらで歌える」(2017.9.10.)。

とはいえ、戦災を主要因とする家庭環境の激変の中で、望月一人安穏と勉学を続けていく余裕がなくなった。終戦直後、地方の町村とは異なり、焼け野原の中での都会人中間層の生活は脆弱だった。日本の大都市では、生活世界が激変した。東京も例外ではなく、高校でも通常の授業ができていたかどうか疑問である。また長男としての責任意識もあっただろう 17 歳の望月は、典型的な「焼け跡闇市派」として荒れ果てた東京で様々な「アルバイト」を手当たり次第に行なっていた。

1）新宿駅頭（南口か）で、宝くじ券の立ち売り。時々やくざがやってきて、「誰の許しを得て商売やっているんだ」とおどす。そのとき、同じように駅頭でアルバイトをやっている拓殖大学の学生が「兄さん、俺が守ってやる」といって、やくざを追い返してくれた。ともに学生帽をかぶっているから、同じ境遇に意気を感じたのだろう。池袋駅頭でもやっていたらしく、その後、池袋に降りるのは避けていたとのこと。

2)「敗戦後しばらくしてのアルバイト（このドイツ語読みは当時の旧制高校生たちの『造語』でした)、板橋の占領軍（この言葉 Occupied Forces は当の施設のあちこちに表示してありました）の資材置き場で、業者が運び込んだ木材を指定の倉庫にキチンと整理して収納する、100 パーセント肉体労働でした。池袋の、当時まだ再開してなかった旧三越の前で友人たちと待機していると、トラックで来たバイト周旋人が、「おう、今日は 30 人。日当は〇〇円…」と怒鳴っ

て、そのトラックで作業場へ行ったものです。「アルバイト」とは材木の移し替え、「肉体労働」の感覚そのものの表現でもありました。えーと……。つまり、まだ何も創り出していないのに、価格は「外から」やってきた、という「肌での感覚」なわけです。仕事の奪い合いもあって、我々は眼つきの悪い連中に脅されたことがあります。あれ以来 70 年間、ぼくは池袋駅から外へ出たことがありません。（通過はもちろん別）」（2018.8.30.）

3）闇市商人に雇われて、千葉などへ食料の買い出しや、郵便事情が悪くなり、東京の会社が大阪の本社との書類の交換をするのに、「運び屋」のアルバイトをやった。

「僕ははじめっから、こうした「道徳感情」を信用してない。僕が市場に参加したのは戦後のアルバイト時代だ。優しい態度で接してきて、ひどい搾取をする雇い主の一例：静岡に「塩」（素人が海岸で作った粗塩）を買いに行って、それを身延線で甲府へ運び、「炭」（木炭の俵だ）と交換し、東京へ持って帰って換金する、という、骨がきしむような運搬作業があった。重い荷物をしょって、満員の列車に必死に割り込むのがたいへん。この「事業」の「資本家」は、品がよく物腰やさしい美人の奥さんだったが、とにかくシビアで、炭の品質が悪い、俵が破れている、とか、いろんな難癖をつけて、容赦なく労賃をカット。ここは数回でやめた。

いろんなことを思い出したついで。郵便制度がめちゃくちゃに混乱して、郵便が宛先に届かなくても当たり前、というような状勢の時、たとえば大阪本社と東京支社との書類の受け渡しに困った企業が、私的郵便システムを作った。マネージャー（こいつは逓信省のＯＢだった）が、東京のある拠点に、支社の郵便を集め、それをアルバイトに担わせて、大阪と神戸の「拠点支社」に運ぶ。夕方までに、そちらの東京本社への書類をまとめ、再び深夜の東海道線に乗り、明け方の東京拠点に持ち帰る、という、これまた原始的というもおろかな単純労働だ。「荷物が重要書類ばかりだったから、アルバイト仲間はみんな旧制高校生だった。事業元の息子が成蹊高校だったから、その縁で、だ。一高生・武高生（武蔵高校）・商大予科生もいた。東京駅から切符は事業元払い」（2017.10.3.）

「一回の荷物は、いったん背負ったらもう地面には下ろせない。自分ひとりでは立ち上がれないからだ。10 貫目ぐらいあった。ひどい労働だったが、このマネージャーはニコリともしない、一見冷淡なやつだったが、東京からの荷物が過重にならないように配慮してくれ、大阪からの荷物が規程より重かった時は、黙って重量計でオーバーした分を払ってくれた。時には夜行列車の弁当のおかず（自宅で奥さんが作ったもの）を、「口に合わないかも」と渡してくれた。

しかし、こうした悪徳も正義も、いずれは分業＝交通の積み重ねのなかで、事態必然的に、「ならされる」。どちらも摩耗するわけだ。市民社会を「善人のゲゼルシャフト」と見ない、またそれをも目指さない。人間を社会が変えるという基本的視点に立たなければ「資本の文明化作用」も信じられなくなる。ちょうど、労働過程で労働者が類的視点をしだいに獲得してゆく

ように、分業＝交通過程でも、人はだましだまされながら、等価交換を学ばざるを得ない。僕はそういう、「非情の市民社会」論に立つ。それが最も「人間的＝ゲゼルシャフト的」だからだ。

【補足】「弁当のおかず」とは。大阪を経て神戸の拠点に着くと、夕方まで事務所の片隅で眠る。目覚めてから、そのために三宮の闇市で買った米一合を、飯ごうで炊いて弁当箱に詰める。帰りの夜行列車で食べる主食だ。おかずも、闇市であれこれ見繕って買った。その「おかず」を買わなくて済むように、という配慮だった。」(2011.4.20.)

4) 吉祥寺の古本屋店員。店主は旧制福岡高校を政治活動で退学になった人物で、戦後も政治活動に忙しく、神田の卸への古本買い出し、値段つけなども任された。

望月はこうして、東高高等部に通いながら、アルバイトをし、また戦後の高揚する社会運動の中にも、一時かなり熱心に身を置いた。そして身体を壊した。1947 年頃、初期の肺浸潤だった。栄養不足の上に過酷なアルバイトをこなしたことが原因だろう。そのためこの年度内か翌年度からか、はっきりしないが高校を休学した。それから 1 年、改めて高校 3 年次に復帰しようとしたとき、旧制東京高校は廃校になった。1949 年 5 月には東京高校は東京大学に吸収され、翌 1950 年 3 月に廃校。もし 1 年間の休学がなければ、1949 年高等科卒業になるから、旧制度のやり方でそのまま東大に入っていただろう。一方で生活苦もあっただろうが、なにより旧制東京高校はなくなり東大へはもう簡単に進学できる制度ではなくなって、新制度下での受験をしなければならず、その準備はできていなかった。

2009 年 10 月 26 日のインタビューで望月は次のように語る。

「もし受けるとしたら、それこそ、普通の高校生と同じレベルで入らなくてはいけないんだけれど、もう自信が無かった。というのも勉強も、あのころの旧制高校の、あれは英語ともう一つ、国語とか歴史とか、日本史と、あと二つくらい受ければよかった。ところが新制になってしまったから、高等学校と同じで数学が入ってくるし。ところが 7 年制で文科へ進むか理科へ進むかというのは、早くから皆決まっているわけ、心の中で、あるいは父親たちの影響で。文科系は数学をやらなくていいというふうに、3 年くらいからは数学をやらなくなってしまった。ところが新制大学になってから皆、数学を受ける、と。歴史なんかはばばっとやればいい、数学は嫌だなと思っているうちに結局生活が苦しくなってしまって。」

この時点で望月は大学進学を一旦諦めた。ところで、(旧制) 東京高校の卒業はどうなっていたのか。「東高は新制度のもと「廃校」(になり)「東大教育学部付属高校」に衣替えしたが、東高の資産保存や歴史編纂ほかの残務整理の事務は続き、専修大編入試験に必要な卒業証明書もここで発行してくれたわけだ」(2017.10.9.) と回顧しているが、2009 年 10 月 26 日のインタビューでは私が「結局は卒業されずに…」と問うと「ええ、結局病気、結核 (肺線) で長期休

学しているうちに、元の学校が無くなってしまったわけだ」、と答えている。また 2010 年 1 月 29 日のインタビューでも「高等学校はそれでも 3 年で中退したから、2 年間で、…実質 2 年は通って、3 年には上がったのだけど、退学届は 3 年で出したのだ。」と語っている。望月が退職する 1999 年 3 月、当時の学部長泉武夫氏によると「1948 年に東京高等学校高等科文科甲類を 3 年で中退されて…」(『専修経済学論集』第 33 巻第 3 号）とある。進学を諦めた望月は、失意の念を抱いたまま、またアルバイトにいそしんだ。

「夜は高円寺駅前マーケットの夜警、昼は「雑誌のピン外し」をやっていた。売れ残った雑誌を溶かして「仙花紙」に再生するには、雑誌を綴じている針金を一々取り除かなくてはならない。そんな半端仕事が、どこから舞い込んできたのか、今では全く記憶に残っていない。

戦後しばらくのあいだ、空前の雑誌ブームだったから、時評誌からエロ雑誌まで、もう何でもあり、だ。その中に定期的にまじって『経済評論』があった。その中の連載講座・マルクス経済学入門、実はこれが、僕の、たぶん本格的な「マル経入門」だったのだ。ピン抜きの山の中から、それだけを保存して繰り返し読んだ。中でも当時東大助手だったかの相田茂の、理路整然（と思えた）たる「再生産論」は忘れられない。『潮流』なんかもあったな。月刊・週刊雑誌ばかりでなく、たぶん配送か返本かの輸送の途中で、固表紙が破損したり濡れたりて売り物にならなくなった単行本も時にはまじった。

ああ、『近代資本主義の系譜』がその中にあったのだ。どうしてか、一度濡れて表装がボコボコに歪んだ代物だった。夜警は 3 人か 4 人で、時間を決めて交替で出る。拍子木を叩いて「火の用心」と唱える。その間、詰め所で、夢中になって読んだのだ。…『系譜』が、僕の中に実は潜んでいたが眠っていた「学問への憧れ」にほっこりと火を付けた。大塚さんは、世間知らずのパウロにとってのイエスだったのだ。…大塚『系譜』の他、中央線沿線の古本屋店頭で戦前の満州本が安く売られていた（当時 5 円均一の一冊）鈴木小兵衛『満州の農業機構』(1937 年)、満鉄調査部『北支那の農業と経済』(1942 年）などを読み、特に『満州の農業機構』は「マルクスの「マ」の字も出さない、まさに「満州経済の『資本論』」だった。前者（『北支那の農業と経済』）では、今も頭に残っている、「支那には村落共同体というものは存在しない。存在するのは宗族共同体である」という基本テーゼだ。この視点は、今もなお「中国の農村」という文字に接するとき、呪文のように脳裏に浮かび上がってくる。」(2017.10.5.)

（※この「夜警」のアルバイトは 2010 年 1 月 29 日のインタビューでは 1951 年専修大学への編入学後の思い出となっている。恐らく種々のアルバイトが記憶の中で混在しているようだ。）

一度は高校時代にマルクス主義的社会運動の中に加わり、こうして改めて書物に触れていくうちに、次第に一つの想いに囚われるようになる。「「学問をしたい、それも大学で」という、身が火照るような体熱」(2017.10.5.）を伴って。

Ⅰ-3. 専修大学への編入学

1951 年 4 月　専修大学商経学部経済学科 2 年次編入学

1954 年 3 月　専修大学商経学部経済学科卒業・同年 4 月大学院修士課程へ

1956 年 3 月、専修大学大学院経済学研究科修士課程修了（同年 4 月専修大学助手）

「2 年への編入試験がある、という、まさに人生の岐路を指し示してくれた情報が、どこから舞い込んできたのか、まったく思い出せない。…試験は、やさしい英語のほか、三つぐらいの選択論文だった。後で知ったが、東洋史の教授だった三島一（はじめ）先生出題の「アジア的生産様式について知るところを記せ」だった。たぶんだが、この問題を選択したのは僕だけだったんじゃないかな。ドンピシャとはこのことで、「満州の政治と経済」の基本知識とピン抜きで学んだ雑学を総動員して、一枚びっしり書いた。…この試験のあと、「君、ちょっと来てくれませんか」と別室に呼ばれた（全員面接ではなかった）。「ぼくは学生部長の相馬です。」と前置きして、どうして本学を志望したのですか、と動機を聞かれた。ずっと後で聞いたが、長い歴史のなかで、旧制高校から専修大に入学したのは、僕が二人目だったという。」（2017.10.5.）

こうして望月は専修大学に二年次編入という形で入学し、学部－大学院（修士）－助手というコースを歩むことになった。ただ、最初の一年間は学生生活を送るのに精一杯の経済的な苦しさは続いた。

「赤貧洗うが如しっていう、学校に行くのに定期を買えなくてさ。…それで大学に行くときにタバコを 4 本買って。バラ売り屋がある。 1 箱が 20 円もしなかったから。4 本買って 10 円。タバコのバラ売り屋って、知らないだろう。で、4 本買ってさ、大事に包んで。昼メシは食わない。弁当を買えないんだからさ。みんなが昼メシで食堂に行ってるときは、書庫に入って本を読んでた。そのうちに福永さんに拾われて、大学の図書館で勤められるようになって。それからだな安定したのは。だから、一番苦しかったのは最初の 1 年だ。」（2010 年 1 月 29 日インタビューより）

「半年ほどして、当時生田の学生部長だった福永先生に「入学後、どうしているか」と聞かれた。…福永先生に呼ばれて生活環境を聞かれたのだと思うが、そこで「実は懐具合に問題が…」（もちろんそんな言葉遣いではない）と窮状を吐露したところ、図書館長でもあった福永先生が「それなら、今図書館で人手が要るから」とアルバイトを世話して下さったのだ。僥倖というか、三年生になったとき、新設された「特待生」（授業料全額免除）制度で救われた。この時

から、大学院修士課程を終えるまで、ずっと図書館バイトで暮らせた。福永先生には今もって感謝し切れない」(2017.10.5.)

学生生活や当時の教師たちとの交流はどういうものだったのだろうか。望月は入学後すぐに「経済学研究会」という学生サークルに入会した。

「学生掲示板で見た「経済学研究会」にすぐ入会したら、上級生（ぼくは、こういう時は「先輩」という言葉は使わない）が、「ちょうど会誌を出す計画がある。何か書いて」というので「使用価値社会と価値社会」という小文を出した。「ドッブ＝スウィージー論争」を一ひねりした小文だ。教員にも当然配ったから、＜旧制高校から…＞に加えて話題になったんだろう。

「インタビュー」のまえがきで、君が「ワグナー評注」訳に触れているが、あれは第二号あたりだ。なんで「ワグナー」かというと、当時出ていた独文『資本論』の第一巻には付録としてこの「ワグナー」が載っているのに、長谷部訳の邦訳には収録してなかったからだ。図書館で、昭和中期に出た高畠訳『資本論』には載ってない。で、ドイツ語の勉強かたがた、訳してみた原稿を、研究会誌に出したわけ。ただし、いまだに「評注」がマルクス思想上、どんな意義があったのか、知らない（笑）。」(2017.10.5.)

私の手元にある望月最初期の論文コピーは上記「マルクス・ワグナー評注」(『専修大学経済研究会々報』) であり、ガリ版刷りのこの会報は 1951 年 11 月発行である。この前にもう一本論文を書いているとのことであるから 1951 年 4 月の専修大学への編入学早々、二本論文・翻訳を発表していたことになる。専修大学での学部時代は小林良正、秦玄龍、雪山慶正、平瀬巳之吉などから親しく教えを受けた。

雪山慶正について

「雪山慶正先生のことを思い出した。坂の降り道、研究室の向かいにある学生会館の敷地は、ぼくの通った当時は旧日本電気の社宅が二列に並んでいた。一戸に三室あったから、比較的上級の社員の住まいだったろう。そこに、京都から上京して来られた雪山先生が住んでおられた。

一度、前に書いた「ワグナー評注」のドイツ語のことで、先生宅を訪れたことがある。最初は質問だったが、「君、今どんな勉強をしてますか」などと言う話題から派出する「知的会話」が楽しかったのだ。その後、先生が小林先生と共訳で、ヒューバーマンの『資本主義経済の歩み』を岩波新書で出すことになり、ゲラの段階で「一度目を通して感想を聞かせて」と言われた。

内容はごく平易な経済史だったから、何か注文を出すというレベル（当方の実力の問題）ではなかったけれど、二つだけ誤訳を見つけた。イギリス近代史の中で Leicestershire, Worcestershire という地名が出てくる。先生はそれを「ライセスターシャー、ウォーセスターシャー」と訳しておられた。ぼくは、その頃、イギリス中近世経済史研究でよく引用されるコスミンスキーの「十三世紀の賦役と地代」を、経済学研究会誌に載せるべく翻訳していたので、すぐ目に入った。正しくは「レスタシャー、ウスタシャー」だ。まだ校正の初期段階だったから、いずれ岩波の編集部あたりが直すだろうが、先生は赤くなって「そうか、そうか、ありがとう」と言って下さった。『資本主義経済の歩み』（ヒューバーマン）の訳者序文（雪山筆）にぼくの名が載ってるのはその縁だ。（後に知ったが）先生の父君は、京大独文科の講師だったから、ドイツ語は得意でも英語（と言うよりイギリス史）には詳しくなかったんだね。

雪山先生も「何か」（ぼくの推測だが、シュンペーター夫人の「満州経済」についての本を訳しておられたから、その内容に関連してか、（詳しくは知らない）治安維持法に問われ、短期間だったが当時中野にあった刑務所に収監されておられる。」（2017.10.9.）

2009 年 10 月 26 日のインタビューでは

「雪山さんの「農業経済論」という話を聞いているうちに、雪山さんとはどういう人かなと、授業が終わったあと、ちょっと質問するようなふりをして。雪山さんは朝鮮農業をやっていたからね。講義の中で朝鮮の地主制などと話していたから、「私、鈴木小兵さんという人の本を読んで非常に感心したのですけれど、これどういう人ですか」と。「ああ、あの人は」などと言ってね、満鉄のボスなんだよ。…それで「こんな本を読んでいるのか、君は」などといってさ」「そのとき（ヒューバーマン『資本主義経済の歩み』翻訳の頃）雪山さん体が悪くて、大学も休んでいたなぁ。私はほとんど毎日のように、大学の下の、今の学生会館のあったところに先生の所に寄っちゃあ、おしゃべりをしていました。ある夏、奥さんがね、富山の田舎へ帰るって言うので、奥さんは私の顔を見てね、じーっと見てね、「望月さん、雪山のお世話願いますか」と言うんですよ。何だろうって言ったら、「ちょっと、田舎へどうしても帰らなければならないので、ところが病身の雪山を残しちゃいけないから、お世話願いますか」って言うから、「どういうお世話か分かんないから、要するに、ご飯炊いてみそ汁作ればいいんでしょう」と言ったら、「それで良いんです」と。そうだな、10 日ぐらいはしたかな。その時にヒューバーマンの本が、要するに商業資本主義から産業資本主義へという古典的なやつだったから、私は商業資本主義からじゃあ生まれないんだ、と言う話を『資本主義経済の歩み』の、それとはだいぶ違いのある、大塚・高橋史学の近代史分析の方法を、先生にご進講を申し上げて‥‥、先生にご進講を申し上げているつもりになっていた」。

専修大学図書館には雪山慶正寄贈の南満鉄調査部『北支那の農業機構（上)』が所蔵されている。なお岩波新書のヒューバーマン『資本主義経済の歩み』は小林良正・雪山慶正の共訳となっている。その中で訳者前書きは雪山の手によるものだから、恐らくは主要な訳者は雪山だろう。望月の上記証言にもあるが、その前書きには、「私の学生」3 人に世話になった旨が記されていて、その中に望月清司の名前がある。

ゼミは講座派の代表的人物の一人、小林良正のゼミに入った。しかし小林良正は専修大学学長になり、望月は小林ゼミに籍を置きながら、秦玄龍ゼミで勉強をしていた。また平瀬巳之吉は望月がマルクスの絶対地代論の理論的根拠に関する質問に対して、ハガキに小さな文字で表（おもて）面にまでびっしりと書かれた返答を何度も学生望月に送っている。そのうちの 2 通を、望月は今も保存していた。一学生からの質問に平瀬は丁寧な対応をしていた。

小林良正について

望月は学部・大学院を通じて講座派の代表的人物の一人小林良正のゼミに籍を置いた。小林は新制大学に移行した 1949 年に学長となり 1952 年まで勤め、すぐに大学院長に就任、さらに 1958 年には再度学長に就任して 1961 年までその立場にあった。望月の 1951 年編入学から 1956 年の大学院修士課程修了まで、小林は大学行政職にあって忙しかった。それゆえ、秦玄龍ゼミに出入りしてもいた。小林が望月に対して膝を交えて講座派のディシプリンを叩き込むという状況には恐らくなかっただろう。それは晩年の小林良正の言葉にも表れている（小林良正「望月清司『マルクス歴史理論の研究』を読んで感あり」(『経済』1977 年 1 月号、No.153、新日本出版社)。しかしそのことは望月がその後の研究過程で、「唯物史観」への批判を密かに内包して自由な研究活動を展開する上で、結果としてプラスに働いたと考えられる。2009 年のインタビューでは小林に対して望月は次のように回顧している。

「私が少しずれてもさ、どうだっていって、全然非難がましいことを言わない。この頃、どんなことやっている、教えてくれって言って。…結局、そっち（学内行政…筆者）の方が忙しくて、あまり話ができなくて、残念だね、って言いながら、私は、事ある度に先生のお宅に行って、こんな論文を書きましたが、読んでくださいと言って。…だから、ちょくちょく私の家に来て、と（小林先生が…筆者）いうのは嘘じゃなくて、ほんとなんだよ。」(2010 年 1 月 29 日インタビュー)

(『経済』に書かれた小林の望月『マルクス歴史理論の研究』評に触れて)「望月は道を少々踏み外したようだが、私は正道を守る」と言ってね。で、彼（『マルクス歴史理論の研究』を中国

語訳した韓立新氏…筆者)、すごく感心しちゃってさ、あれを読んで。で、マル歴のこの中に、つまり、とことん厳正なマルクス主義者でありつづけた小林良正は、弟子から捧げられたこの本に対して峻烈な学問的批判を加えたという、で、そういう教師にこの本を捧げたっていうことも、立派だが、それに対して感謝をしながら、厳正な学問的批判を加えた、これは一つの日本の学界においては、一つの美談である、と、書いてある」。(2010 年 1 月 29 日インタビュー)

ここで、小林良正「望月清司『マルクス歴史理論の研究』を読んで感あり」(『経済』1977 年 1 月号、No.153、新日本出版社) を一部引用する。

「『マルクス歴史理論の研究』の著者、望月清司は、私の研究室出身の逸材である。今から考えるとすでに 15 年以上も昔のことになるが、彼は、すでにその当時から、その周到な研究態度と、精緻極まる分析力とで著(あら)われ、また語学的素養も秀逸であった。彼のマスター論文のごときはーすでにさだかには覚えていないけれどもーともかく抜群の出来栄えだったと記憶している。やがて彼は、私のもとを離れ、彼自身の研究室に文字通り立てこもるようになり、それこそ「書物の虫」のようになって研究を進めている旨聞いていたが、私は、反対に、柄にもなく、もっとも苦手とする「大学管理」を押しつけられるはめとなり、本来の「研究」からはどうしても手を引いて、「管理」に専念しなければならなくなり、したがって彼との学問的接触も稀有になってしまった。しかし、彼がときどき発表した雑誌論文などによって、彼の研究がますます進み、かつ独自の道を地道に歩いていることも察知できた。」(182 頁)

そこから小林は、『マルクス歴史理論の研究』批判を展開する。その要点は、第一に『ド・イデ』のマルクス分業史展開論とエンゲルスの所有形態史論の腑分けに対する批判、第二に望月による「教義体系」批判に対する反批判である。そこに通底するのは、マルクス、エンゲルスおよびレーニンによる資本主義分析・批判の歴史的有効性を堅守する小林の確信であった。その上で、この論文の最後に小林は「望月清司君!ーここで私は、君に、二人称をもって呼びかける。」と述べて、望月に語りかける。

「実は、本文も、最初、二人称型で行こうかと思ったのだけれども、三人称型の方が、客観性があってよかろうと思って、三人称型を採ったのである。本稿は、本来、君のヴィトムンク(献呈)に対する私の応答のエティケットを志して筆を起こしたものであったが、しかし、さればといって私本来の立場も堅持しなければならない。この点は、君も納得しうるであろう。…目ざわりの個所、またときとして礼を失している個所もあるかも知れないが、もしあったとしても、それは決して他意のあるものではない。もって諒せよ」(197 頁)。

この小林良正の誠実な言葉・姿勢は、自らの寛容さを「装う」たぐいものでは決してない。それは心のままの教え子への語りかけである。小林良正の人となりに直接接したことのある私

は、そう断言できる。ちなみに小林良正が言う「彼自身の研究室に文字通り立てこもるようになり」というのは、どういうことか。若い研究者として望月が送っていた研究生活の一端を、さらに見ていく。

「その時の住まいは四畳半一間だから、とても本なんか置けない。…結婚したら本棚も片づけないと、実は布団も引けないと、四畳半だから。(研究室があてがわれて）やあ、助かったと思って本もみんなこっちに持ってきた」。当時の神田校舎の研究室は、大部屋各自の机があるものの、授業の合間に休みに来る程度の場所だったらしい。望月はその部屋の角に本棚を 2 つ置き、3 畳ほどの空間を確保した。「1 年ぐらいしたら、ある本をとったらね、ぽこっと箱しか出てこないんだよね。おやおやと思って見たら箱の中に入っている本がないんだよ。あああっと、青くなっちゃってね。盗まれたんだよ。20 冊か 30 冊位だよ、つまりもぬけの殻になっちゃった」。事務にねじ込んでもらちがあかない。そこで自衛のため、「ベニヤ板を買ってきて、そして打ち付けて、ちょうど角だったから、こっち側の本棚の後ろにベニヤ板をこう、こっち側にベニヤ板を 2 枚張って間にドアつけてカギをつけて」(2009 年 10 月 26 日インタビュー)、その中で黙々と研究を続けていた。これが「文字通り立てこもった」実相である。

その頃のことを同僚であった長幸男は「望月君なんかも、彼独特のエンクロジャーをやって、蛍光灯がいくつもあって工夫して勉強されていた」(『専修大学社会科学研究所 40 年史』1993 年、95 頁）と語っている。時を経て望月は『マルクス歴史理論の研究』を小林良正に捧げ、さらに2011年5月北京の清華大学と南京の南京大学での講演冒頭に、恩師への想い出を配置した。

「後年、私は近世東ドイツの「再版農奴制」の研究をしているうちに、教義体系では当然とされた議論は、実はこの言葉を最初に用いたエンゲルスの事実誤認に基づくものだ、という趣旨のことを、学会で発表しました。

エンゲルスは、「ドイツ農民戦争」が農民側の敗北に終わったあと、領主の側からの反撃で搾取が厳しくなり、農民には、ずっと前に廃止された「賦役労働」が復活した、つまり、昔の「農奴制」が「再版」されたと述べました。実は、ドイツでの研究は、「農奴制と言っても名称だけで、戦後も、農民の地位に特別な変化は見られない」という説が主流だったのです。

この学会発表は、私の学界デビューでもありましたが、発表が終わったあと会場は、シーンとして「質問なし」でした。エンゲルスの権威を傷つけたのですから当然ですが、「質問なし」は無視、というより、私の心理からすると一種の辱めでした。

その後小林先生にお目にかかった時、その研究発表のことを少し洩らしたところ、先生は、

眉も動かさず、ひとこと「ゴーイング・マイ・ウェイだ。自分の信ずる道を歩めばいい」とおっしゃってくださいました。私は生き返りました。

この本（『マルクス歴史理論の研究』）が出たとき、私は迷いもなく、これを小林先生に捧げました。教義体系を遠慮なく批判してはいますが、先生の「ゴーイング・マイ・ウェイだ」というお導きだけは、忘れずに守りました、というご報告をしたかったからです。先生はたいへん喜んでくださいました。

… 「ゴーイング・マイ・ウェイ」。この先生のお言葉は今も耳に残ります。韓先生（『マルクス歴史理論の研究』翻訳者である韓立新清華大学教授）に、小林先生の私への批判論文をコピーして差し上げた時、私は小林先生を尊敬をこめて「リベラル・スターリニスト」と呼びましたら、韓先生は大笑いなさいました。たとえスターリニストであっても「リベラル」であり得る。私は今も、そういう小林先生の学生であります。」

望月が「教義体系」の脱構築を明確に示す『マルクス歴史理論の研究』を、揺るぎなき「教義体系」の人格化された小林良正に献呈したのには、師弟関係ということもさりながら、むしろ当時の専修大学経済学部に講座派のスタッフが多かったことによる、望月の戦略的な配慮もあったのではないか。また上記の中国講演の冒頭に小林良正氏の思い出を語ったのにも同様の戦略的配慮があっただろう。つまり、「教義体系」の真っ只中で、それへの批判をベースとした自らの市民社会論を語るに際して、「たとえスターリニストであっても“リベラル”でありうる」と述べるのは、研究者中心の出席者たちの中に、最初から拒絶反応を抱いてやってくる者を想定し、「それでも私の話を虚心坦懐に聞け」という警句を込めたのだろうと私は思った。

Ⅱ．研究者としての日々

Ⅱ-1. 1970 年まで

1956 年　専修大学商経学部助手

1959 年（昭和 34 年）4 月　専修大学商経学部講師

1963 年（昭和 38 年）4 月　専修大学経済学部助教授

1966 年 8 月　ドイツ・ゲッチンゲン大学に在外研究（～1967 年 8 月）

1974 年 4 月　専修大学経済学部教授

1975 年 11 月　経済学博士（専修大学）

1982 年 9 月～1986 年 8 月　専修大学経済学部長

1989 年 6 月～1998 年 8 月　専修大学長

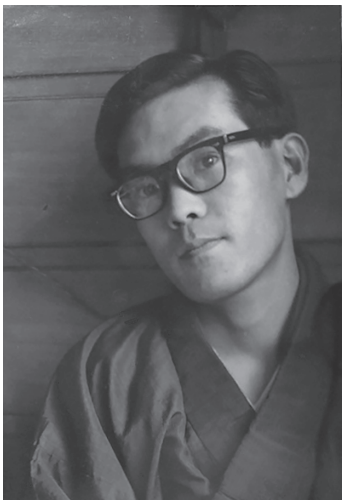
1999 年 3 月　専修大学退職

1956 年、大学院修士課程を修了し助手となる。すでに前章で助手時代あるいは研究者時代について触れていて、時系列的に多少重複するが、彼の修士論文は『グーツヘルシャフトの成立と市場構造』。学部時代の 1953 年、経済学研究会の会報『経想』に「東ドイツにおける農業労働力の存在形態－グーツヘルシャフト研究ノート」以来の問題意識を修士論文として書き上げ、さらにそれを展開したのが助手時代の 1957 年 1 月「グーツヘルシャフト成立前期と騎士団国家の市場構造」（『専修大学論集』第 13 号、専修大学学会）である。私見によれば、この論文での「封建体制下にありながらも顕現する農民の自己労働による生産物の交換社会」という主要論点こそ、その後の望月市民社会論を貫く原イメージである。だがこの論文は、大塚史学における局地的市場圏概念の中世後期東部ドイツへの適用と理解することが可能であり、大塚史学が講座派的歴史観と真っ向から対立するものでない以上、望月の歴史観もまだ彼の言う「教義体系」への抵抗感があったわけではないと思われる。

実生活面では助手に採用され、これを機に結婚（克子夫人）。しかしまだ生活は苦しかった。

「あのころ、助手の初任給は 9000 円で、荻窪の四畳半一間の家賃が 4500 円。一畳千円というのは相場だった。アルバイト院生のころに無理して買った大阪市大経済研究所編『経済学辞典』（岩波書店）は、質屋に入れ出しするために、箱は大事に取っておき、カバーをかけても辞典の背表紙に皺が寄らないようページも大開きせず、丸一い紙面で読んでいたっけ。助手就任と同時に、私立女子高の教師をしていた家内と暮らしはじめてからは、家内の（結婚記念）腕時計が質草に加わった。」（2012.1.16.）

こういう状態の中で、望月は神田校舎の研究室に「文字通り立てこもって」（前述）研究に打ち込んだのである。望月はすでに活字にした自らの論文に、後からびっしりと加筆する習慣があった。自宅には極小から極太の字が書ける万年筆を多数持っていた。しかもその胴部を握りやすいように、かつペン先を書きやすいように削っていた。きめの細かいヤスリと時計職人が使う片目に付けるルーペでもって。万年筆は失敗品も含め、10 本以上あった。ワープロを使うようになる以前のことである。



1964 年

1956 年から 60 年の時期の研究テーマはヨーロッパ封建

制下の農奴制についてであった。それまでの農奴制についての通説は、古典古代的生産様式における「奴隷」制を経て、封建制下では賦役地代を担う「農奴」から（現物地代を経て）貨幣地代を担う「隷農」へと移行し、それに応じて人格的支配は緩みかつ生産物余剰の一部が農民の手元にも残るようになる。こうして力を蓄えてくる農民と領主の「生産関係」に変化が生じるというものだった。これに対して望月は、日本における「農奴と隷農」用語の使用がドイツの歴史学と異なっており、中世において両者に歴史的な範疇分けはなく、さらに「奴隷及び農奴」が併存しており、それはマルクスの認識の中にあることに気がつく。また「再販農奴制」とは、その初発地域である西南ドイツに限ると領主一円化策による名目上の再農奴化のことであり、実質上は生産関係そのものを変えるものではなかった、と認識するに至った。これらの思考は、従来の唯物史観とは相容れるものではない。ただし、この頃の望月の諸論文は非常に回りくどい筆致で議論を展開しており、そのため読む者にとって、その要点を引き出すのはかなり苦労する。それは恐らく講座派に対する彼の戦略的配慮という理由だけではなかったろう。恐らくは、この時期、望月自身が講座派的歴史観に次第に齟齬を感じ、そこから離れていく過程での、躊躇や錯綜が筆致に表れているのではないだろうか。

続いて望月はマルクス『資本主義的生産様式に先行する諸形態』研究に入り、農業共同体最終段階におけるアジア的・古代的・ゲルマン的形態の 3 つの類型、とりわけゲルマン的形態の研究を行う。彼は研究の中間的成果を専修大学社会科学研究所『月報』に次々と掲載していった。この研究の原動力になったのは、大塚久雄『共同体の基礎理論』による、これら 3 形態を唯物史観における生産様式の継起的発展説と組み合わせる手法への強い反発意識であった。望月が「教義体系」から自覚的に離れていくのはこの時期ではなかったろうか。

このマルクスのテキストはもともと『経済学批判要綱』の中の一部分であり、望月はまだ『諸形態』を『要綱』の文脈の中に位置づけるという視点はなかった。1966 年、その内在研究にいち早く取り組んだ平田清明氏を招いた専修大学社会科学研究所の研究会で、そのことに気づかされた望月は、平田のその指摘をもって「平田ショック」と述べている。

この問題意識を抱えたまま、研究会の直後にドイツへの在外研究に赴き、ゲッティンゲン大学を拠点に従来からの研究テーマに沿ってドイツ中世農業史の研究にいそしんだ。1966 年 9 月から 1967 年 8 月までの一年間である。単身で赴いた望月は大学の学生寮に住んだ。受け入れたのは同大の農業史研究者ヴィルヘルム・アーベル教授（Wilhelm Abel, 1904-1985）である。アーベル教授は望月に、東部ドイツ農業史の研究ならケーニヒスベルク大学で資料を探すことをアドバイスした。戦後、ケーニヒスベルク大学はゲッティンゲン市に移転し、当時は同市に存在していたのだ。アーベル教授は戦時中ケーニヒスベルク大学に在籍したこともあり、引っ越してきた同大学との関係も浅からぬものがあったのだろう。アーベル教授のアドバイスにより早

速、望月はケーニヒスベルク大学に資料を探しに行った。以下は 2009 年 10 月 26 日のインタビューからの引用である。

「ケーニヒスベルク大学がソ連からの侵略を受けて、財産いっさいを持って逃げて、ゲッティンゲン市の中にケーニヒスベルク大学があった。やっぱり全部は持ち出せなかったんじゃないかな。でも中世史の本は、それなりにあったから。で、アーベルさんに聞いたら、そんなことをやっているのだったらあそこに行きなさい、ということでもっぱらケーニヒスベルク大学で。（市内に）少し大きな屋敷があり、その屋敷が大学です。何か講義もしていたみたいですよ。誰が、その学生になっていたのか知らない。」

「ケーニヒスベルク大学の図書館で、なんだかぽこぽこ抜けているんだけど、グーツヘルシャフトの文献をずっと筆写していたら、そのうちにあるところでぽつんと切れて、研究が。それは当たり前だよね。1935 年くらいからぷっつりなくなっちゃって、ナチスの時代。…戦後になるとみんなポーランド語なんだよ。…ケーニヒスベルク大学としては自分の存在価値を確保するためにも、せっせと、ポーランド語も含めて、文献を集めていた。（そこで）雑誌論文の抽出はやめて今度はゲッティンゲン大学の図書館に行って、それこそ古いところから始めようと。新しいところじゃない。せっせとコピーした。」

留学を終えその帰路、望月は当時東ドイツだったドレスデン、ライプツィヒに立ち寄っている。ゲヴァントハウスに隣接するライプツィヒ大学は、統一後 30 年を経た現在、校舎はガラス張りの建物に建て変わり、校舎前にあった巨大なマルクスの金属レリーフは撤去されて東独時代の面影はまったくなくなったが、1966 年当時は次のようであったという。

「ライプツィヒ大学行った。当時、カール・マルクス大学だったから、名前からしても良いではないか、さっそく行ってみた。表は堂々としているのだけど中入ったら天井がない。だから、研究室、2 階、3 階が研究室になっていて、どんなところかなと思って入ってみると、研究室はそれなりに外向きになっていて、扉が貼ってあるのだけれど、天井がないから雨降ったら廊下は水浸し」（同インタビューより）。

帰国後、在外研究の成果として、1969 年「近世西ドイツにおける市民地主制について」（『専修経済学論集』、第 7 号）、1970 年「農業改革以前の東エルベ地主制について』（『土地制度史学』第 7 巻 2 号）を書いている。しかしむしろ注目すべきは、「平田ショック」を経たマルクス『経

済学・哲学草稿』、『ドイツ・イデオロギー』、『経済学批判要綱』研究で、雑誌『思想』や『現代の理論』においてマルクス研究を矢継ぎ早に発表し始めたことであった。望月清司の名前が全国的に知られるようになる画期がこの時期であった。恐らくドイツ滞在中も、留学中に日本に残してきたこの「ショック」について、考えを巡らし続けていたのだろう。帰国から 1 年 3 ヶ月後、『思想』誌上の「『ドイツ・イデオロギー』における「分業」の論理」(1968 年 12 月号)を発表した。そのきっかけを作ったのは、専修大学経済学部の内田義彦であった。

「今もあるかな、神田の「バンジョー」という喫茶店で。一風変わった頑固おやじが、うちのは東京で 2 番目にうまいコーヒーだなんて威張っていた店だ。社研の研究会か何かのあと、その喫茶店で内田さんと話した。そこでウェーバーとマルクスという話になったんだが、私はこんな事を話した。『資本論』のなかに、「これまでの全経済史の基礎は都市と農村の対立である」という、謎かけみたいなフレーズがあるけど、誰もそれに触れていないので真意を探りかねて悩んでいたころ、ウェーバーの都市論を読んでいるうちに、あれ、あの命題はウェーバーで解けるんじゃないか、と気付いた、という話だ。「対立」と訳するとケンカになっちゃうが、そうじゃなくて同権者どうしで向かい合う、という把握。それが『資本論』の中のあの命題の真意、鍵じゃないですか。そんな話をしたら、内田さんがおもしろがって、「ぜひ、『思想』で書きたまえ」と、編集部の伊藤修さんに紹介してくれたんだ。」(『望月清司先生に聞く』(『専修大学社会科学研究所月報』2011 年 4 月、No.574、23-24 頁)

1970 年代の望月の学部ゼミ合宿では内田義彦『資本論の世界』を輪読していた。時には森田桐郎ゼミとの合同ゼミを開いていた。望月にとって森田は学内で相互に研究室を訪れて議論を交わす、最も親しい同僚だった。一方、思想的には最も近いと思われる内田義彦とは年齢も違っていたせいか、学内外での私的な交流・交際はあまりなかったように見えた。その点では相互に好意を抱きながらもクールな関係だった。

『現代の理論』誌の常連執筆者になったのは、森田桐郎（1931-1996 年）との交流に端を発する。1960 年に専修大学に入職し、9 年間在職した森田は、その後学芸大を経て東京大学へ移った後も望月とは親友であり続けた。後期望月の第三世界論研究のきっかけも森田によるものだった。1996 年、研究上でもプライベートでも親友であった森田桐郎の葬儀で、望月の憔悴しきったたたずまいは、傍目にも強い印象を与えた。

「『現代の理論』に載せてもらった縁は、助教授になった頃、「国際経済論」担当で入職してきた森田桐郎くんの紹介で、だ。…当時若手のあいだで話題だったステレオ、レコード談義に

入ってきて仲良しになった。書店街の真ん中には、まだ都電が走っていて、「専大前」停留場から、秋葉原まで一直線だったから、アンプやスピーカーの品選びに話は具体的に盛り上がった。その彼が素性を露わにして、安東仁兵衛にぼくを紹介したのだ。森田くんは、人を人へつなげる人脈作りの天才で、その後も、のちに東京経済大学の学長になった井汲（卓一）さん中心の「構造改革派」の会合に誘われるようになったが、これは当時のイタリア直輸入でぼくにはピンと来なかった。

学生のなかの「構改派」はメット連の中では影が薄かったが、安仁（安東仁兵衛）が妙に肩入れしていて、編集長をやっていた『現代の理論』にも時評を書かせていたが、部数がどんどん落ちて倒産寸前までいった（と聞いた）。そこで上京した森田君や井汲先生と協議した挙げ句に、「一つ理論誌として再生して見るか」とバクチのような話になり、僕はしょっちゅう書かされた。むろん原稿料などなし、だ。ところが意外にもこのバクチが当たって、部数がどんどん増えた。当時の感覚では、『情況』を 10 とすると、『国家論研究』が 5,『現代の理論』が 4、といった見当まで行った。相好を崩した安仁（安東仁兵衛）がやたらあちこちに声を掛け、ぼくから見ても「これはどうかなあ」というような原稿まで載せているうち、アウトになった。『国家論研究』は今も出してるね。」（2017.10.6.）

望月が最初に『現代の理論』に論文を上梓したのは 1965 年 11 月号「ブルジョア革命とブルジョア民主主義--いわゆる人文学派の近代史研究によせて」である。それから 5 年後の 1970 年 11 月号に「マルクスにおける「市民社会」の歴史理論」を書き、その後常連執筆陣に名を連ねることになる。だが 1970 年頃の掲載論文タイトルを一瞥すると、まだこの雑誌は「理論誌として再生」というまでには至っていなかったように見受けられる。その後も、従来通り、そのときどきの社会・政治・経済問題を取り扱う構造改革路線をとる雑誌という印象だった。望月の言う「理論誌として再生」するのは 1971 年 4 月号（第 87 号）からである。この号から「マルクス・コメンタール」特集を組むようになった。その後、望月も編集に深く携わるようになったが、上記のように筆者を広げ、望月が「これはどうかなあ」と思うようになった頃は、1975 年あたりだと思われる。雑誌の傾向がもとのような社会・政治・経済問題中心に特集を組むようになってくると、望月と『現代の理論』の関係も遠のく。望月の『現代の理論』への最後の掲載論文は 1976 年 1 月号「『ゴータ綱領批判』の思想的座標」である。

Ⅱ-2. 望月清司の研究足跡

望月の研究足跡を概観するに際しては、私が 2011 年 5 月、清華大学（北京）と南京大学での望月講演の前に、その学問的業績について紹介したものの一部をここに掲載することで間に合

わせたい。なお『マルクス歴史理論の研究』に言及した部分には一部加筆している。

望月市民社会論の三局面

望月清司市民社会論は、この生産・交換関係としての市民社会という場合に、とりわけ交換・分業を重視し、それを歴史の基礎としてとらえ、マルクスのうちにこの分業史観を読み取ろうとしたところに特徴がある。その場合、1973 年に公刊された望月先生の『マルクス歴史理論の研究』だけでは、なかなか理解が困難な固有の望月市民社会論を捉えるためには、先生の初期からの研究業績を追うのがもっとも有効であると思われる。そこで、私は先生の生涯の研究の歩みを三局面に分けてみる。

第一局面は 1953 年から 1967 年まで　農奴制研究

第二局面は 1968 年から 1980 年まで　マルクス歴史理論研究

第三局面は 1981 年から 1983 年まで　第三世界論研究

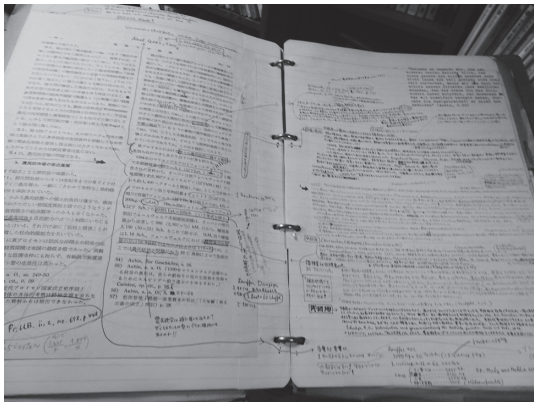
なお、1983 年以降は、大学での学部長 4 年、学長 9 年の長きにわたって行政職を勤められ、そちらに全力を傾注されていた。

とりわけ私が重要だと思うのは、第一局面である。その中でも 1957 年に書かれた「グーツヘルシャフト成立前期と騎士団国家の市場構造」(『専修大学論集』13 号）を少し詳しく紹介したい。

9-10 世紀以降、農民の土地保有が認められるようになって、農民は自らの剰余生産物の交換を始める。その一事例としてエルベ川以東のドイツ東部におけるグーツヘルシャフト成立前の農民的市場の存在についてこの論文は論じている。13 世紀にドイツ騎士団がドイツ東部に侵入し 14 世紀にはドイツ西部からの農民の植民を推進した。その場合、植民農民に対し、税制面や所有権での優遇措置がとられた。領主直営地での賦役は直属のゲジンデ（隷属民）にやらせ、植民でやってきた農民への賦課は軽微なものだった。それゆえ農民は一定の生産物余剰を自由に処分できる（先生の試算だと平均農地２フーフェ（33.6 ヘクタール）保有農民で 40%)。(中世イングランドでは１ヴァーゲート (10 ヘクタール) で十分生産物余剰が出るという説もある。) 彼らは自ら一日の往復行程内にある市場に持って行き、そこで売る（＝交換する)。この農民的市場、これが都市である。それは特権都市ではありえない。そして「都市と農村の分業」とは、農村の生産者たちが、自らの生産物を交換する農民市場的小都市を生み出す（＝外化・疎外する）ことである。もっともその生産物（穀物）は、最終的には領主やハンザ商人によってドイツ西部やイギリスに売りさばかれるのだから、「自由な交換」といっても幾重にも限界はあるのだが。

とはいえ領主による支配にもかかわらず、生産者の自由な交換が行われる。われわれはこれ

を「市民社会」として表象してよい。その意味で、「封建制下における市民社会関係」と言うことは可能である。もちろん商品交換の普遍的展開を基礎とする資本主義において、市民社会関係は普遍的広がりを可能とする。望月市民社会論の特徴は、諸個人の交換関係としての分業が、あらゆる支配にもかかわらず、直線的にではないが展開すること、それを歴史の起動因とみなすところにある。もちろん望月先生もこの第一局面では、封建制下における市民社会関係という表象を、そこまで明確に意識していたわけではないだろう。しかし、第二局面での望月市民社会論の原基は明らかにここにある。



「グーツヘルシャフト成立期と騎士団国家の市場構造」への書込

そうだとすると、従来の唯物史観、とりわけ生産様式の継起的発展、および封建制から資本主義への転換という歴史観は、望月市民社会論とは相容れない。それゆえ、第一局面の望月先生の農奴制研究は、古典荘園＝賦役地代給付農民＝農奴（Leibeigene）から純粋荘園＝現物・貨幣地代給付農民＝隷農（Hörige）という図式を壊そうとする。またそれゆえマルクスが「奴隷および農奴」と、両者をセットにして想念していたことを指摘する。さらに「再販農奴制」について、これは 15，16 世紀に南西ドイツで行われたもので、これは農奴の経済活動自由化の進行を阻止するものではなく、ドイツ東部のグーツヘルシャフトは賦役を復活したのではなく、賦役を新たに課す反動化だったことを明らかにした。

結局のところ、身分的には中世における、自由農も農奴も保有農という点では実質上同じであり、彼らは生産物剰余の交換に入っていく余地があり、その下に下層農業労働者や奴隷がいた。幾重もの制限付きではあるが、この農村小生産者の商品交換が市民社会のプロトタイプである。

そして『資本制生産様式に先行する諸形態』は、決してアジア的－古典古代的－封建的という継起的発展説のためのテキストではなく、農業共同体のタイプ分けであり、その比較から、ゲルマン的共同体にこそ、諸個人の交換・分業を生み出す契機があったことを見いだすものであったことを、望月先生は探り出そうとした。これが第一局面である。

次に第二局面。ここで重要なのは、『思想』三論文である。

1968 年 12 月「『ドイツ・イデオロギー』における「分業」の論理」

1969 年 5 月「マルクス歴史理論の形成－分業論的歴史分析の展開－」

1969 年 9 月「マルクス封建社会観の基礎視角－ウェーバーの都市・封建制論にふれて－」

われわれはどうしても第一論文、つまり『ド・イデ』におけるマルクスとエンゲルスの歴史観の相違を明らかにされたこの論文を先生の研究史上の画期と見なしがちだし、当時もこの論文が非常に注目された。しかし実は、先生から直接伺ったことだが、この三論文は第三論文が先に構想され、その論証のために第一論文、そして第二論文が書かれたという。先生の当初のもくろみでは第三論文が中心だった。

そこで第三論文から見ていくと、これは封建制と農奴および隷農のこれまでの通説的な概念的結びつきを引きはがし、身分上は農奴や隷農である農民たちの、比較的自由な商品交換＝分業がなされる「都市と農村の分業」に歴史変革の重要な鍵を見いだそうとする。この部分は、すでに第一局面で研究されていたことだ。そしてそれは単にマルクスの方法だけではなく、ウェーバーの方法とも共通しているというのがこの論文の要点である。

そしてそれを証明するために、第一論文でマルクスの分業論的な歴史観を『ド・イデ』に探り、第二論文であらたに『経済学批判要綱』を分析し、そこにおける分業展開史としての依存関係史論を取り出す。この場合、マルクスの依存関係史論とは、商品・貨幣を媒介とした分業の展開、つまり物象的な人と人の依存関係展開史として理解され、その理解から人格的依存関係とは、通常理解されているような階級関係ではないことを指摘した。人格的依存関係の下に沈んでいた物象的依存関係が表に現れ、それによって社会的交通が全面化した極北に、広がり尽くした人格的依存関係が再浮上するという、極論すれば物象的依存関係の展開史として読みとられた望月先生の理解は、それまで日本でこの依存関係史論と唯物史観の接合を試みてきた他の市民社会論者（例えば平田清明氏ら）とも大いに異なる望月先生の独自性と言える。これは『マルクス歴史理論の研究』の中でも詳細に論じられている。これも望月先生の独自な考察だった。ここは後ほど先生の方からお話があると思う。

第二局面はもう一つ課題があった。望月先生は 1968 年「『経・哲草稿』における事物の疎外と自然の疎外について」（『専修大学社会科学研究所月報』No.59）において、人間の歴史貫通的な自然対象への関係行為としての「労働過程」、これを『経・哲草稿』（正確には第一草稿）の中に読み込んだ。だが、そこからは『ド・イデ』に内在する分業論が出てこない。その分業論視点は『ミル評注』の中にあることを発見し（1971 年「ドイツ・イデオロギー」、『マルクス・コメンタールⅢ』現代の理論社）、基本的には 1971 年までに初期マルクスにおける歴史展開の分業論的把握の一本の系を明らかにした。こうして 1973 年『マルクス歴史理論の研究』が生みだされたのである。

そして第三局面。

『マルクス歴史理論の研究』は、基本的には初期マルクスから『経済学批判要綱』までの研究に、上記『思想』第三論文の議論を深めた第 7 章を配置したものである。すなわち望月先生は初期マルクス研究において照らし出したマルクスの分業展開史論を、『要綱』における依存関係史論とつなげた。さらに『要綱』内の「資本家的生産に先行する諸形態」分析において、マルクスがゲルマン的共同体の中に「労働と所有の同一性」を体現した諸個人の協働・交換関係の原基を見出したことを探り出した。この「労働と所有の同一性」つまり自己労働の所産を自ら領有する個人は、資本形成直前の小生産者として現れるが、現在の資本家が自らの資本を「自己労働の所産」として主張することへの批判として、『要綱』内の「領有法則の転回」論が展開されていることを望月先生は指摘する。なお領有法則の転回とは、資本の第一循環の開始時点で、可能的資本家の勤労と節約を仮に認めたとしても、資本の第一循環の終わりの時点で、他者の剰余価値を簒奪するのだから、この資本家の「成功」を自らの勤労と節約の結果として認めるわけにはいかない、という論理だ。ところで、そもそも資本そのものが、小生産者の「労働と所有の一体性」を解体して生まれたものであるから、「資本の原始的蓄積」の解明が必要であるが、『マルクス歴史理論の研究』においては、この原始的蓄積に関して、特に『資本論』第 1 巻 24 章に関しては分析対象として論じられていない。しかし、農奴ならざる実質的自営農＝労働と所有の一体性の解体については、第一局面での『諸形態』研究でも望月先生は大きな関心を示していた。

また封建制下における農民の自主的な商品交換が行われている社会「構造」、封建制の下での様々な生産諸関係（望月先生は常にこの概念を複数で用いてきた）の構造的関連性について論じられることもなかった。

こうした問題が第三世界論の潮流に先生が加わって解き明かそうとしたことではなかったか。この第三局面を代表するのが次の四論文である。

1981 年 4 月「第三世界を包みこむ世界史像」（『経済評論』日本評論社）

1981 年 7 月「生産様式接合の理論」（同）

1981 年 12 月「第三世界研究と本原的蓄積」（同）

1982 年 5 月「本原的蓄積の視野と視軸－『資本論』原蓄章を読む－」（『思想』No.695、岩波書店）

まずこれらの諸論文で際立つのは、「接合」概念の発見であり、ここに異種的な生産様式の有機的「接合」が現代世界資本主義の構造であるのみならず、第一局面で出てきていた、封建制下での農民的商品交換関係と領主・大商人の前期的資本の異種接合をわれわれは想起できる。

次に資本の原始的蓄積に関しては、すでに『マルクス歴史理論の研究』において、労働と所有の同一性（労働者と生産手段の結合）の暴力的分離と資本による再結合という論理が『要綱』

の中にある、つまり別言すれば、労働と所有の同一性が共同体によって支えられていたものを、資本はその共同体から労働者を引きはがし、同時に生産手段からも引きはがし、自らの工場内で再結合する。その過程で、生産手段を有する小生産者は原始的蓄積によって生産手段から分離され、資本制的な生産様式が成立するが、彼らは工場内で搾取されるにもかかわらず、今や自らの労働力を交換手段として持つ主体なのであり、その意味で、資本家による支配にもかかわらず、市民社会関係は内在する。またこの資本制的な生産様式においてこそ、交換と分業は飛躍的に発展する。そこに将来社会の基礎がある。階級闘争とは、まずもって労働力の価値どおりの交換を求める、交換主体としての市民的労働者の運動であり、市民運動もまたここに基礎があるだろう。なお、原始的蓄積の形態はいろんな形であり得るだろう、ということになり、原蓄の多様な形態を提起した。

望月市民社会論とは、あらゆる形式の支配にもかかわらず、人は分業的関係の中で労働する。だから労働し交換関係の中に入っていくこの関係こそが市民社会であり、その展開こそが歴史の進展である、というものだ。それは第一局面での 14 世紀ドイツ東部の農民的市場を具体例としてイメージすればよい。その意味で、第一局面の研究が、先生の生涯の研究の基礎として、全体を貫いていることが分かる。

現代市民社会論が、政治的セクターと経済的セクターの間に市民的公共圏を想定し、具体的にはこの公共圏での討議による公共的意見の形成、あるいは自発的諸団体による社会的活動、これらが両セクターをコントロールするという構図にある。従って、この市民的公共圏は経済的過程から遊離していることによって成り立つ。すると、市民的意識はどのように形成されるのか（ハーバーマスは生活世界おけるコミュニケーション行為によるとする。だとするとこのコミュニケーション行為は何を契機に成立するのか？見知らぬ者同士のコミュニケーションは「交換」を契機にせざるを得ないだろう）。またこの場合、経済過程から遊離したところで形成される意識による市民的公共圏への参加は、自発的な「自覚」によらざるをえない。それは日本における市民社会論への先祖返りだ。望月市民社会論が、自己生産物の交換・分業関係にあるとすれば、意識は生産と交換の場で、まずは形成されるはずだろう。現代市民社会論の「自覚」の基礎を経済過程から切り離さないために、望月市民社会論の意義がもう一度評価されてよい。（以上）

望月はその後、1982 年 9 月から 86 年 8 月までの 2 期 4 年間、経済学部長を勤め、さらに 1989 年 6 月から 1998 年 8 月まで専修大学学長を 3 期 9 年勤めた。研究職から多忙極まる行政職への移行は、緻密な研究と準備を経て、成果をまとめ上げるその作風からして、さらには、数え切れない学長としての挨拶を逐一周到に準備して臨む性格からして、研究活動の継続はほぼ不可

能になった。以下で、望月の研究業績を三つに区分して紹介するが、その最終局面である第三世界論あるいは本源的蓄積に関する業績が 1982 年 5 月を最後に中断しているのは、象徴的である。

1999 年 3 月末、望月は定年まで 1 年を残して依願退職した。2000 年 7 月、望月を一身で支えてきた克子夫人が亡くなった。それ以降、望月はマルクス研究から離れ、『万葉集』をはじめ『勅撰和歌集』に沈潜し、かつそれらの精神世界の場である奈良や京都を一人旅していた。2007 年の時点で望月のパソコンには、6,500 もの詩が収録されており、たとえば「こもりくの初瀬」をキーワードとする詩が 400、そしてその先頭には『万葉集』から、妻を失った初瀬川の鵜飼い詩が収められていた。

隠国（こもりく）の　泊瀬の川の　上つ瀬に　鵜を八つ潜（かづ）け
　下つ瀬に　鵜を八つ潜け　上つ瀬の　鮎を食はしめ
　下つ瀬の　鮎を食はしめ　麗（くは）し妹に　副（たぐ）ひてましを*
　投（な）ぐるさの　遠ざかり居て　思ふそら　安からなくに
　嘆くそら　安からなくに　衣こそは　それ破（や）れぬれば
　縫ひつつも　またも合ふといへ　玉こそは　緒の絶えぬれば
　縛（くく）りつつ　またも合ふといへ　またも　逢はぬものは　妹にしありけり

望月の説明によると、「初瀬川の上流と下流でたくさんの鮎が捕れた。それを売るために、妻に食べさせてやるのを惜しんだ。その妻が亡くなったとき、漁師は、ああ、あの鮎をもっと妻に食べさせてやればよかった。布は破れれば、またつなぎ合わせることができ、飾り珠のひもが切れてバラバラになっても、またひもでつなぐことができる。しかし、亡くなってしまった妻にはもう逢うことができない」、という歌である。望月は千数百年前の鵜飼いの精神世界に、亡き夫人を想う自らを重ね合わせていたのである。

Ⅲ．望月清司の「思想」

Ⅲ-1.『望月清司先生に聞く』の成立

ここまで、望月清司の生い立ちから研究者としての歩みを概観してきた。しかし彼は研究成果の中で、自らの思想あるいは市民社会思想を具体的に表すことに非常に慎重だった。以下ではインタビュー記録、メールからその思想を紡ぎ出したい。

2009 年 10 月から 2010 年 1 月にかけて三回行ったインタビューによる専修大学社会科学研究

所月報『望月清司先生に聞く』では、個人史に当たる部分はすべて削除し、さらに第三回で中心的に扱われた現代市民社会論に関する望月の感想についても、ほとんどカットされた。日本固有の市民社会論に対しては、近代主義、生産力主義として批判がなされ、あるいは望月の注目する「資本の文明化作用」に対しても根強い批判があった。それらを意識した私の質問は、『望月清司先生に聞く』では、ほぼすべて削除されることとなった。その部分、およびそれと関連するメールを紹介し、望月の市民社会思想をそこから読み取りたい。

『望月清司先生に聞く』は企画から実現まで 10 年かかった。本稿「はじめに」でも触れたが、それが実現する過程についても少し触れておきたい。2000 年に望月の大学院ゼミ生で教員となっている者たちとかつての同僚が「先生」を囲んでいわゆる「望月研究会」を定期的に開くことになった。それを通じて、望月市民社会論に関する論文集の公刊をもくろんでおり、そこに望月を囲む座談会も入れようと考えていた。座談会のために各メンバーが質問を用意し始めた矢先、2000 年 7 月に夫人が亡くなり、その後は研究会そのものを開ける状況ではなくなってしまった。こうした経過の中で、私も望月市民社会論に関する論稿を書くため、初期望月の諸論文を読み、かつ改めて『マルクス歴史理論の研究』や、第三世界論諸論文を再読した。座談会の計画が座礁して数年後のことである。そのうち何とか私一人でも質問を組み立て、インタビューができそうに感じるようになった。確か 2006 年当たりからそのお願いをし始めたように記憶している。しかし何度提案しても断られ続けた。その理由は望月によると「当時の心境とその歴史的背景をすぐには思い出せない（もう半世紀も経つのだ）ので、「気が重い」という方が正確だった。適当に、いい加減な答えをして、それを君がいかにも意味があるように、重々しく文章化して、それがぼくの真意だと後世に残るようだといやだなあと、思うがゆえの「気の重さ」だ」(2009 年 10 月 5 日)、というものだった。

やっと引き受けてもらうことができたのは、2009 年に先生の『マルクス歴史理論の研究』の中国語訳（訳者：韓立新清華大教授）が一つのきっかけではなかったろうか。それを機に望月も当時のことを再考することが多かったはずだ。しかし 2009 年 10 月末から 2010 年 1 月末にかけて三回のインタビューの最中、あるいは終えた後も、望月は録音の文字起こし作業によって他人にプライベートな部分を見られるのを嫌い、生前に公表することを拒否する、という具合でこの企画は何度か座礁しそうになった。こうした紆余曲折があったが、インタビューの文字起こし原稿を構成・校正をする作業の段階で、やっと『社研月報』での公表に同意を示し、翌 2011 年 4 月に刊行にこぎ着けたという次第だった。同年 5 月 10 日、望月に宛てて私は次のようなメールを送った。

「望月先生　『月報』4 月号「望月清司先生に聞く」、出来上がりました。ゲラの段階でほぼ同じものを見ていますが、こうして出来上がると改めて感慨深いです。先生にすぐにお渡しで

きなくて恐縮です。今日、私がまだ現物を手にしていないときに、学内で高橋祐吉さんがすれちがいざま「今、研究室で読んでいたところだ」と声をかけてくれました。社研は中国でのシンポジウムで配ることを配慮してくれて 70 部くれました。原稿を月報 2 回分に分割せず、中国行きに間に合うよう 4 月号に割り込ませてくれたことは、宮嵜（晃臣）事務局長の私（事務局長経験者）への配慮でしょう。

思い起こすと、私は 2006 年頃から社研の事務局長の任期切れが見えるようになってきて、月報制作などで裁量のきく任期中になんとか、望月研究会での企画（1999 年）を実行したいと思い、かつ、当時のメンバーを加えた形では無理な状況なので、一人でやるしかないと決めて、何度か先生にお願いしました。これがうまくいかず、しかし 2009 年に、やっとインタビューを引き受けていただけました。

不定期の自分の日記を見ていると、1 回目と 3 回目のインタビューのあと、「活字化はいやだと言ったはずだ」と先生から言われ、相当がっくり来ました。それでもプライベートなところは削るということで妥協してもらい、こうして形になりました。原稿化から校正段階では細かなところまでやっていただいて、本当にありがとうございました。

インタビューから録音を起こした生原稿の整理、そして校正と先生との共同作業は 1 年半かかりました。しかし「月報」の中にも書きましたが、私の方は、どの段階も掛け値なく楽しい作業でした。こういう原稿に関する仕事で楽しみながらやれたのは初めてです。改めて御礼申し上げます。明日、現物をそちらに郵送しても 12 日に届くのは微妙なので、13 日、直接空港でお渡しします。ご了解下さい。一筆、ご報告まで。村上」。これに対して望月は折り返し、「ほんとによく粘ってくれたねー。何度も何度も断って、いまとなっては、申し訳ない思いでいっぱいだ。でも、おかげで、活字にはならないまでも、いろんなことを思い出させてもらった」、と返信をくれた。

ちなみに末尾の「空港でお渡しします」とは、望月と私が中国に出発する直前だったからである。2011 年 3 月中旬、『マルクス歴史理論の研究』中国語翻訳者の北京・清華大学教授韓立新氏よって、清華大学および南京大学にて望月清司を囲むシンポジウム（5 月 13 日～19 日）が企画された。望月はその招待に応諾した。私は、講演の前にまず望月市民社会論の概略と意義を私が論じる提案を「売り込み」、同行を申し出た。何せ望月本人が自らの理論の「意義」を語ることは憚れるはずである。望月は承諾し、また韓立新氏も、当初から望月の高齢を心配していたこともあり、私の同行に、一も二もなく賛成して私も招待してくれた。さらに南京大学側の主催者である張一兵教授は、私に南京大学の学生に日本の市民社会論について講義をするようにとのことだった。シンポジウムでの私の報告は望月よりずっと短いものになるから、バランスを配慮してのことだったと推察する。こうして韓立新氏と張一兵氏の細やかな配慮によっ

2011 年 5 月清華大にて

2011 年 5 月南京大にて

て、望月と私の一週間の中国旅行が実現し、私にとって生涯の大切な想い出となった。3 月からこの 5 月までは、私と望月とのメール交換はこの中国行きの準備のことで占められていて、5 月 10 日のメールは、私から望月へ、中国への出発直前に社研月報『望月清司先生に聞く』が出来上がったことを知らせ、それを直接「空港で手渡しする」というわけだった。

この対談によって、望月市民社会論への理解が少し広がったと思う。それまで市民社会論に触れた研究論文で望月清司の名前が出ても、明らかに「これはろくに読んでいないな」というものばかりだったのが、その後、小野寺研太『戦後日本の社会思想史』(2015 年、以文社)、山田鋭夫「市民社会論継承の二つの視角－平田清明と望月清司」(『市民社会と民主主義』2018 年、藤原書店）のように、正確かつ正当に理解した議論が現れた。実際、望月は山田鋭夫氏とのメール交換で、『望月清司先生に聞く』が望月理論の再読に「最良の手引き」だったとの感想を寄せてくれたということを、私に知らせてくれた。

Ⅲ-2. 市民社会論は生産力主義か

清華大学と南京大学での望月シンポジウム直前に完成した『望月清司先生に聞く』は、実はインタビューの半分程度を文字化したものに過ぎなかった。プライベートな部分、あるいは私の問題意識が色濃い性急な質問と、それに対する望月の応答部分は、相談の上ほぼカットした。インタビューが望月の研究の歩みをたどるという主旨からしてそれは適切であった。しかし私見では、市民社会論の現代的課題という点では、そのカットされた部分に望月市民社会論の思想が垣間見られる。以下では、それを紹介する。

◇**村上**　1990 年代終わり頃から、日本でも固有の市民社会論の系譜とは切断されたかたちで、市民社会とは生活世界あるいは市場システムと政治システムの中間領域に位置し、そこで諸主体のコミュニケーションを通じて形成される活動の総体ということになっています。そしてそれが市場と政治の暴走を制御し、より民主主義的な社会へ、と。そうなると、市民とはこの活動領域に意識的に参加する主体ということになります。参加の契機は「市民的価値観、市民的徳、あるいは相互信頼」となる。運動論的には各種アソシエーションそのものが「市民社会」となります。

『マルクス歴史理論の研究』の中で、先生は依存関係史論について、市民的交換制度＝貨幣関係とは貨幣＝交換価値を媒介としてゲゼルシャフト的に関連しあう生産者たちの「分業」関係であることによって、ひとつの歴史的な「生産関係」であった、と言われます。そのうえでこの関係性は、「どんな個性、どんな人格、どんな顔をもとうと、かれにとっては「どうでもよい」」（『歴史理論』342 頁）というものだということです。これに対して直接的人間関係への回帰を考える人たちによると、これでは寂しすぎるというだろう、人間には etwas mehr があるだろう、と言うはずです。たとえば、山之内靖氏であれば人間の直接的感性的関係や、ハーバーマスであれば知性・理性的関係、あるいは生活世界におけるコミュニケーション行為を間主観関係の基礎として想定します。これらは人間の労働（従って分業）が人間活動の前提・基礎であるという認識より上に、別途何かあるだろうということだと思います。労働・交換はむしろ自然と人間に対する道具的認識･行為であり､自然を破壊し人間を操作することになるという。これについてどうお考えでしょうか。

◆**望月**　まあ、そんなのは放っておけというと、ちょっと無責任だけど、もう少し、というか、かなり長期のパースペクティブを持ってなきゃ、独りよがりに終わるのではないかな、という気がする。例えば、ちょこちょこっと、この前、メモしたのだけれど、そういう、知的テクノクラートぶって、無知な大衆を啓蒙するという、そういう姿勢はもうやめた方がいいだろうという、むしろ、状況を正確に歯に衣着せずに分析するという、その分析で信頼を得るというスタンスをとるべきではないかな、そういうふうに思いますね。

◇**村上**　ハーバーマスの場合は、つまり当時の東ドイツの公式的な階級闘争史観ではない西欧型の社会変革運動、例えば当時の学生運動とか、市民運動をどういうふうに理論の中に取り込むかというところで、マルクスを相対化します。そこで、労働過程は人間の基礎的活動だが、コミュニケーション行為もある、と。そこから市民を主体とした社会変革の可能性を構築しようとします。山之内靖氏は、現在の労働運動というのは、これは悪しき近代の中にあって、物

取り闘争あるいはシステム維持の役割に堕している、ということで、それだったら近代システム外の、例えば同性愛運動やエスニックの運動というものに期待をする、そういうことになっています。山之内さんはハーバーマスの理論をかなり取り込んでいます。その意味では両者とも似たような部分があって、それが先ほどの質問の“etwas mehr”ということなのです。

◆望月　私はもっとバラバラなんだよ。いつも思うのはね、「12 人の怒れる男」という、あの陪審員の映画ね、よく見ていると非常に工夫されているのだよね、12 人が。ユダヤ人であったり、ギリシャ移民であったり、人種差別主義者もいるし、こう、ビジネスにしか関心のない男もいるし、という、非常に綿密に選ばれたキャスティングなんだよ。皆、勝手なことを言い出して、それこそ、ユダヤ人を公然と馬鹿にするような人種差別主義者もいるし、「てめえら、移民が何を言うのだ」って、もともとのアングロサクソンがギリシャ人を馬鹿にする話も出てくる。無茶苦茶なケンカをしながら、最後は、こう、結論に至ってさ、で、その後がいいのだよ、がああ、途中で雨が猛然と降ってきて、終わるころカラッと晴れるのだよ、それで地面が濡れているけど、空は晴れている。それで、別れるときお互い「よう、よう」なんて言って挨拶なんかしないわけだ。さようならとも言わないで、わあっと別れてさ。で、主導権を取ったヘンリー・フォンダがとぼとぼ歩いていると、彼に最初に賛成したじいさんが、「ところであなた、お名前は」って、言うんだよ。で、名前を言い合って、じゃあ、さようならって言って別れるんだ。これが市民関係なんだよ、私にとっては。

◇村上　知らない者同士の織りなすひとつの社会関係ということですよね。

◆望月　その、知らない者同士が合理的・非合理的、人種的・反人種的、いろんな思想をもった連中が、こう、一つの目的を達成するためにとことん話し合う、と。話し合ったけど、それで、なにか、こう、「一杯やりましょう」なんていうのではなくて、さよならといって、さらさらっと別れるのが、これが私の理想的な市民社会だよ。

あれは、まあ、戦後のファシズムに勝ったというアメリカのある種の高揚感のもとでさ、アメリカン・デモクラシーの理想型を世界に宣伝しようとした映画だと悪口を言う奴がいるけれど、あれはシドニー・ルメットだからね。アメリカ社会そのものに対する非常な、深い批判的な洞察を持った監督なのだ。彼が作り出したアメリカのデモクラシーだよ。私はもう、アメリカ映画は好きだけどさ、いまだに最高の映画だと思っているね。

◇村上　とはいえ、それに反対するというか、不満を持つ、そうではない直接的な人間関係の

持つ暖かさとか、共生とか、現在はそういう議論がむしろ、いっぱい出てきているように思うのですが。市民社会論の中からも、外からも。

◆望月　その、市民社会を脅かすか、一歩でも良い関係を作り出すかという逆のベクトルの他に個人的な信愛とか恋愛とかさ、人種間同士の連帯とか、そういうのがあるかと思うけど。要するに、後ろ向きか前向きかという、基本的にはそこだけだよ。

◇村上　そういう世界というのは別にあるというふうに捉えると、つまり、ハーバーマスが言うように、生活世界というのを別に置くというのも、おもしろいかも知れないですね。公共的世界と生活世界という。ただ、生活世界については、あまりよくわからないところがあって、プライベートな領域。ただ、公共的領域も、生活世界から出てくるとは言うのですけれど、生活世界の中のコミュニケーション、そこにはあまり利害が出てこないですね、やっぱり。

◆望月　利害がなきゃ、仲良しクラブだから、あったっていいし、なくてもいいし。懐かしみの世界だからね。やっぱりね、あの「12 人の怒れる男」もそうだけど、あの中のもう、公然たる反ユダヤ主義的な、あるいは、先に入ってきた白人が後から入ってきた移民を馬鹿にするという、そういう関係を持ちながら、ある問題について共通の見解を述べるという、けれどもまた別れていけば、差別の世界とかね、迫害の世界にまた戻っていくわけで、また、彼らは彼らで、そこで、迫害されることによってアメリカの民主主義をもっとよくしようと考える奴もいるだろうし。時間が経てば黒人も大統領にするという、そういう動きをやっぱり加速するわけだね。私は、ハーバーマスがオバマの選挙をみて、どう思ったかよく知らないけど、やっぱり、少しずつ進歩しているのではないかな、という気がする。あと、アメリカの 63%は進化論を信じていないというから（笑）。それが、せめて「信じてる」が 80%ぐらいになってもらいたいと思うんだけど（笑）。だけれど、あれも、進化論なんて神を冒涜するものだって運動やっている奴がいるから、あれだけ地歩を占めているのだね。

◇村上　例えば日本固有の市民社会論の初期段階で、大河内さん、高島善哉さん、大塚久雄さんなんかの場合なのですけど、一方で知らない者同士が作りあう社会という、合理性をもった社会というモデルを描きながら、大河内一男さんの場合だったら、統制経済下での「新しい憂国の情を持った全体を見通す労働者」、あるいは、大塚さんの場合だったらピュリタニズムですね、そのエートスについて論じられる。それに比べて経済外的な道徳を語らなかった高島さんでも、戦後になると「新しいナショナリズム」というようなことを言われる。それらはやはり

etwas mehr を求めているということになるように思えます。

◆**望月**　政治的な、こう、起伏というよりは、私は基層社会の中の、韓国で言えば家父長制イデオロギーが溶融していく過程の方がはるかに重要だというね、それはそれできっと、世界最強の労働組合と言われる、ヒョンデの、現代自動車の労働組合が、こう、鉢巻して、昔の懐かしい日本の風景みたいなことを今もやっている。やっぱり、それが社会を変えているのだと思うよ。あの、etwas mehr というのがあって、誰かそういう、偉い人が偉いことを言って、皆がそれについていくってね、なんか…。知的でテクノクラートっていうのは、いたよ。要するに知識人がむやみにね、偉そうなことを言って駆り立ててね、理想型はこうあるべきだって言ったって、民衆はそんなものは知らないわけで。民衆が己れの欲するままに従って自己を変えていくという構造の方が私は大事だと思う。

◇**村上**　その後の、内田義彦氏では労働過程論の中で意識形成を説いた功績は大きいと思います。ただ、内田義彦氏の思想について、「生産力主義」という批判がありますが、それは市民社会論全般にも向けられていると思います。現在の地球規模での自然破壊、人間破壊、などに直面して、そもそも生産力の大規模な拡大がその原因だという立場から、生産力主義批判が出てきますが、先生はこれに対してどのようにお考えになりますか。

◆**望月**　もう、言わせておけという感じだ（笑）。特に市民関係、一人の市民だってね、全身が市民社会思想の権化であるわけはないのでさ、一人ひとりが皆いろんな宗教を持っていたりさ、いろんな差別イデオロギーを持っていたり、夾雑物をいっぱい抱えているのだよね。で、その夾雑物同士じゃつながらないけど、分業という利害関係の中でならつながれる、と。そこが、マルクスのおもしろいところじゃないか。

◇**村上**　難しいところなのですけれど、例えば山田鋭夫さんが晩年の内田義彦先生と対談をしていますが、結局そこのところに焦点を絞って質問をしていましてね、生産力の概念、あるいは労働者の概念というときに、労働者がほんとにそういうふうに成長するのだろうか、という疑問がありますが、いかがですか、と（内田義彦『ことばと社会科学』、藤原書店、2000 年、188 頁）。あるいは、生産力が果たしてきた役割といっても、自然破壊とかそういう問題があるのではないですか、と。それに対しては結局、内田さんも答は、自然破壊とか、人間破壊とかは「生産関係からくる生産力の歪み」の問題だと対応していました（同 209 頁）。

◆**望月**　ああ、結局あの自然破壊っていうのは、なんというか、絶対的イデオロギーだとは思っていないのだよ。今、自然の破壊っていうのが絶対的な錦の御旗になっちゃって、他の議論を許さないことになっているでしょう。ですから、私はあれに対しては非常に冷たいのだよ。公正な議論ができてない。

◇**村上**　生産関係という場合に、内田先生の場合には階級関係ということになるのですけれども、望月先生の場合は生産諸関係、第一義的には分業・交換関係というご理解になりますから、「結局は生産関係だよ」と言っても、内田さんと望月先生ではニュアンスの違いがありますが。

◆**望月**　結局は生産力に落ち着くのではないかな。生産力というのは人間なのだから、生産力というのは物の生産力じゃない。まあ、物に発現し、代表されるけど、動かしているのは人間なのだからさ、私は、そういう意味で生産力論だと言われたってびくともしないよ。そこで、力を発揮しているのは人間じゃないか。

◇**村上**　内田先生の場合には戦後の技術論論争という背景があります。僕はこの時代背景をよく知らないのですけれど。内田先生は 1948　年『経済評論』に「星野氏『技術論』の有効性」という批評を書いておられ、「技術論論争」での星野芳郎、武谷三男氏らに与されて、技術とは労働過程において「意識的に適用された客観的法則性」だということを論じられておられます。それはのちの『資本論の世界』での労働過程論につながります。その場合、技術あるいは生産力とは、単なる物的なアウトプットとしての人間の外的システムのことではなくて、人間およびその意識を含んで考えなければならないということだったと思います。先生の場合もその意味での生産力論ということですね。

◆**望月**　とにかく、今の人間類型をどうのこうのっていうのは、パースペクティブとしても非常に短期的だよね。私は特に、人間が歴史的な存在であるのは、そういう分業関係を発達させながらも、なおかつイデオロギーによって拘束されている、というふうに考えるから。イデオロギーの長期的な波動といったものを無視して人間を無理やりつなげようとしたって、無理だというのが私の考えだよ。長い時間が、もう、時間しか決め手はないよ。

◇**村上**　自然破壊については、現在はより切実に感じる時期ではあるのではないかと。産業革命以降、環境破壊の規模がでかくなるし、破壊を行なう人間の数も急速に増加し続けていますし。

◆**望月**　それじゃあ、その、産業革命以前の自然というの、本当に人間にやさしかったかというと、そんな論証はないよ。仮にその、産業革命以前、日本で言うと江戸時代か、もう山ひとつ隔てると道路がなくてさ、言葉が違うというような、そんな世界がいいのかということだ。そういう世界は結局、そういう世界の問題を解決できないだろうという気がするよ。お互いに山ぐらいは高速道路やトンネルで突き抜けてね、「おう、お前らは違った人間だけど、この山をなんとかしようじゃないか」という、そういう話ができるのは生産力しかないのだから。

◇**村上**　その生産力というのは、人間をその本質のうちにはじめから内包しているということで、その、人間を含む生産力という場合に、なによりも分業（交換）の展開を想定するということでいいですね。

◆**望月**　そうだね。分業の展開でお互い損得なしに取引しようじゃないかというのが、ぎりぎり突き詰めていけばそこです。だから、損得よりはお互い仲間で、血を分けあった仲間じゃないかなんていう形で固められたやつは、こりゃあ、溶かしていかなくちゃいかんという。それはもう必ず排外主義になって、血で固まらない奴は付き合わないという、こういうことになる。

Ⅲ-3. 共同体と「資本の文明化作用」

◇**村上**　1980 年代以降、外資導入やそれを強力に推進する開発独裁であれ、結果としてアジアは急速に経済成長してきました。そのとき、マルクスの言う「資本の文明化作用」の是非について、意見が分かれるところです。

先生のお書きになった 1983 年東京大学経済学会『経済学論集』第 49 巻第 3 号「『資本の文明化作用』をめぐってーマルクスは西欧中心主義者であったかー」について、お伺いしたいと思います。この御論文では、そもそも「資本の文明化作用」という言葉自体がマルクスが誰かから借用した括弧つきのものであったが、それを差し置いても、原理論レベルでは理論上それを想定せざるをえない、しかし現実は原蓄における「血と火の煉獄」について、生々しく告発しているではないか。マルクスの理論上の問題と、その現実への価値判断は分けるべきであり、「資本の文明化作用」の一言をもって、マルクスが西欧中心主義者であったかなかったかなどと論じることに意味はない、とおっしゃられる。

しかしその上でなお、理論上の問題として「資本の文明化作用」つまり、Zivilisation des Kapitals が Zivilgesellschaft を生むということについて、これを肯定しない者は、Zivilisation そのものの否定、ひいては Zivilgesellschaft の否定ということになるでしょう。より過激には、「資本」そのものがじゃまだ、伝統的生活でよいではないか、と。これに対して、先生はどのようにお考

えになりますか。

◆**望月**　一番最後の、「伝統的生活が良いではないか、どう考えるか」なんていうのは、全然考えもしない。そんなものは。今更答える必要もない。

◇**村上**　その「資本の文明化作用」ということに関してはかなり反発がある、これはもう、「生産力主義」批判と重なるところがあるんですが。

◆**望月** 大阪市大の本多さんにも言われた。「文明化作用」ではなくて、「文明の破壊作用」ではないですかと。だから「正にそうですよ」と私は言ったの。あのインドの「人身御供を出しても何とも思わない」という、そういう文明を破壊するのが「文明化作用」だからと開き直ったんだ。

◇**村上**　近年「社会関係資本 Social Capital」論が広く論じられてきました。そこでは 1980 年代までの世界銀行の開発戦略上、近代化路線ではうまくいかないので、発展途上国における社会関係に対応した開発援助を考えようということが一つのきっかけでした。大きなダムより地元の共同体が管理できる小さな感慨治水システムの構築を、というようなことです。この場合、地元の伝統的共同体的社会関係を利用するということになる。しかし他方で、伝統的社会関係から近代市民的社会関係へ、という議論も社会関係資本論の中にはある。この後者の議論に対しては、「それはユーロセントリズムだ」という批判がありえます。こうした議論は、「資本の文明化作用」についての議論へ戻るのではないかと思いますが、先生はどうお考えですか。

◆**望月**　ソーシャル・キャピタルの話ね。

◇**村上**　世界銀行の開発戦略というのが、市民社会の強化というようなことを言うのですが。

◆**望月**　ほう、いいじゃないですか。シビリスト作用という概念自体がヨーロッパの市民社会研究を反映しているんじゃないかな。

◇**村上**　その場合に、それはまず不可能だという議論がありえます。それはしかし、現在ある一定の秩序を「破壊」するということになるだろうと。そうすると「市民社会」あるいは他の言葉で言えば、ユーロセントリズムだろうと。先進国の価値観で、第 3 世界を裁断したり、あ

るいは判断したり、変えようという、そういうことになるんじゃないかと。

◆望月　変えること自体、変えようという意志自体が傲慢であると。逆に言うと、それは第３世界で今起きている現状を肯定することに等しいよね。「彼等に任せておけ」ということだろね。だから逆に言うと、もっと望ましくは、「共同体主義」、コミュナリズムというのを、「市民社会」と等価の、つまり、文明が違うだけで、彼等にとってはコミュナリズムのほうがいいのだという、そういう認識をも引き出すことになるのではないか。私は、そういうところで、ＮＰＯでも、命を脅かされながら頑張っている人の善意というのは敬意を表するけど、武装したコミュナリズムというのが支配しているのは、もうこれは、外からわあわあ言ったって始まらないので、「文明化作用」が徐々に浸透して行くのを待つしかないのじゃないのかな。

◇村上　それは、やはり商品経済の浸透という。

◆望月　はい。結局だから商品経済が浸透していないということのほうが、むしろ分析を要する問題ではないかなという疑問がある。だからそんな、賄賂を渡さないと何事も進まないという現状は現状として、例え賄賂を渡してでも、強引に「資本の文明化作用」を推し進めて行く、資本のこの意志に期待するほうが、1000 年経つか、800 年で済むかという物差しを使うと、こっちのほうが 800 年で済むんじゃないかなという気がする。

◇村上　その場合の、破壊のされかたというのは、いろいろあるのだと。いわゆる「原蓄」のいろいろな形として。

◆望月　それはもう、涙無しには語れないような話ばかりだと思うけどね。

◇村上　また、「第 3 世界論」の中で「原蓄」の様々な形というか、形態というのを整理されましたけれども、それはやはり、そういう場所で、様々な形で「原蓄」が行われるということですね。

◆望月　『資本論』を読むだけでも充分なんだね、そこのところは。ぐずぐず言うやつは皆、はんこを捺して奴隷にしちゃって。大体あの連中は平均寿命が 12 年だって。

◇村上　産業革命期のイギリス工業都市ですね。

◆望月　今の第3世界での貧困と同じか、あるいはそれ以上の貧困を、現にイギリスも体験したのだということを、やはり歴史に学ぶべきではないかな。皆、イギリスの資本主義がそんなきれいごとばかりで進んだんじゃないということの、最大の証拠があの「原蓄」だからね。皆、「原蓄」というと牧畜エンクロージャーしか言わないけど、それよりも、頭にはんこを捺して奴隷にしたという、それが「血と火」なんで、先進国も体験したんだから。後進国がそこのところを回り道して成功するとは思えない。イギリス人は、それはそれなりに、歴史的な記憶として持っているから、再びあんな世界にはしたくないというのが、やはり共通の黙契ではないのかな。

◇村上　まあわれわれが言えるとしたら、第3世界における「原蓄」過程、それが様々な破壊作用を生むだろうし、それこそ、「血と火」の煉獄の中を通るということになるのだろうと。

◆望月　ええ、今正にそうだ。中国の農村も同じだろ。

◇村上　正にそうですね。出来るとしたら、それを和らげる援助が少しは出来るかと。

◆望月　ええ、だから、良心の問題として言えば、例え5000万人のうちの50人でも助けるという、助けようという気持ちを非難する気持ちは更にない。更にないけど、それは歴史の、そこで悲憤慷慨したらそれは間違いだ。自分の良心を満たすためにやる仕事を、歴史のせいにしてはいけないということだね。それは必ずしも「冷笑主義」というのとは違うんじゃないかな。「そんなことしても何にもならないよ」というんじゃないな。50人の命は助けられるという。

※この「資本の文明化作用」に関する議論に関連して、2017年4月27日に望月は私にメールをくれた。タイトルは「共同体解体は傍観してていい」というものだった。その背景には、同年1月に書いた私の小文「経済発展（開発）の中のベトナム中央高原」（『専修大学社会科学研究所月報』642・643合併号、2017.1.20）があった。専修大学社会科学研究所は2016年9月にタイ東部のウボンラチャタニからラオスを経てベトナム中部高原からダナンに到る実態調査旅行をおこなった。その後の月報特集号に書いたのが、この小文だった。ここでは日本人のベトナム研究者たちによるベトナム開発論が、農村の伝統的共同体を梃にした農業発展を経て、市場経済化と経済発展を目指すという意見から、市場経済化を前提にした開発の方向を探るという意見が多くなっていることを肯定的に紹介した。当時この市場経済化の波は中部高原にも及び、コーヒー、ゴムの栽培の急拡大に対応し、その労働力としてベトナム国内からの中部高原

への移住民の急増が見られていた。中部高原在住の少数民族はその影響を受け、同時に旧南ベトナム時代から統一後も一貫した開発方針である移動焼き畑農業の禁止と定住農業への転換政策に翻弄されていた。

私はその小文の中で「中部高原の場合、市場経済に対応した農村開発とそのための外部からの植民が、少数民族の生活を暴力的に破壊している現状がある。われわれはこれを『資本の原始的蓄積過程』として傍観できるのかどうか。『共同体から市民社会へ』という歴史観からすれば、『傍観できる』ことになる」（同 92 頁）と、揺れ幅のある自問をしていた。

望月のメールは、その私の一文を読んだあとのものだった。そこで望月は次のように言う。「大兄の、中部高原の村落共同体の半ば暴力的な解体を『傍観してていいのか』という問題提起が面白かった。『傍観』という言葉に、大兄の『かわいそうだなあ』という肩入れの『情』がほの見えて、おかしかった。いつか話したっけ。戦後すぐ、『満州』とか『支那』（この用語は一太郎の辞書に載ってない）とかいうタイトルのついた本が、書店の投げ売り本のコーナーにずらり並んでいて、ぶ厚い本でも一冊 5 円とか 10 円とかで買えた。満鉄調査部（満州の『講座派』だ）編の『北支那の農業経済』という本で、『支那』には『村落共同体』は無い、あるのは『宗族共同体』だけだ、という結論を、今も鮮烈に覚えている。「村」全体が祖先を同じくし、厳格な祭祀で成員を縛っている、というわけだ。中世に、北から南へ逃げてきた連中が、あの円形の城壁みたいな共同住宅に集住している『客家（はっか)』も同じ。200 人ぐらいが、みんな「〇〇家」という一族だ。戦乱などで逃げてきた連中が、「助けてくれ」と頼んでも受け入れない。ウェーバーの言う『共同体内倫理』のゴジラだな」。そしてこのメールのタイトルが「共同体解体は傍観していい」というものだったのだ。長期のスパンで歴史を見る目と、短期的なスパンで現実を見る目の、いわば「齟齬」を、私はベトナム中部高原の少数民族の村落訪問や長老からの聞き取りのあとで、感じていたのだった。歴史家望月の視線は常に長期的な先に向けられていた。

Ⅲ-4. 市民社会論における前近代批判の有効性

◇村上　日本における市民社会論の展開は、戦時中の高島善哉氏、大河内一男氏、大塚久雄氏、丸山眞男氏、内田義彦氏、平田清明氏、そして望月先生へと 1970 年代まで続きます。これを大雑把にいうと、「労働と交換の体系」とその「かまど」の中における諸主体の関係性ということになるかと思います。この系譜の基本的問題意識として、日本社会の構造を規定していた前近代性への批判があったと思います。

「市民社会論」の持っていた、前近代と近代を分かつという、最初の問題意識というか、問題の立て方というのが、例えば日本の場合に、まあ、高度成長期までは、かなり人々に訴える

ものがあったということがあったと思うんですけど、1980 年代以降は、日本における前近代批判はもう課題ではなく、もはや批判すべきは近代そのものだということになっていると思います。その点について先生はいかがお考えですか。

◆望月　「共同体主義」はもう無くなったと。

◇村上　ドイツも同様で、例えば「ドイツの特殊な道」テーゼは、再統一後あまり論ぜられなくなりました。イギリスやフランスと違って、とりわけドイツでファシズムが「成功」したという「特殊な道」を、歴史的にえぐり出すという問題意識が、「戦前ドイツの不完全な市民社会」という認識を生んだ。例えば権威主義や家父長制的な意識といった前近代性の残存がそれですが。こうした問題意識が批判され始めたのが 1980 年代中頃で、そして再統一以後、ドイツも立派な近代であり、19 世紀の歩みはいろいろ起伏はあったが、近代への道だったという歴史観に「特殊な道」テーゼは押された状況になりました。

◆望月　あのね、エマニュエル・トッドという人を知らない？　フランスの歴史人口学者なんだけど。言ってみると、キーポイントは識字率が高いか、そのスピードが遅いか早いかというところから、全世界を分類してしまうという、これは乱暴と言えば乱暴だけど、読んでいると、エマニュエル・トッドというのは、面白い文明化論だなと思うんだよ。

◇村上　でも先生、それで行くと、日本なんかは江戸時代でも識字率が相当高かったという話になりませんか。

◆望月　いやいや、その背後にある市民社会というか何と言うか、イデオロギー的装置というのが、識字率の高さと絡むとどうなるかという話なんだよ。（えーと、ちょっと待ってくれ、これじゃなかったかな。）それにドイツ批判があって、ドイツの家父長制社会というんだよ。父親が強いという。これは新聞に出た限りでの話だけど、文明の様々なタイプというのは、識字率の高さだけではない。それと文明の様々なタイプを組み合わせるという思想なんだよ。で、ドイツは兄弟の一人が相続する直系家族の伝統があり、この限りでは権威主義的で不平等であるが、礼儀正しく完璧な社会である。逆に言うと、礼儀正しく完璧な社会を作るのが権威主義的で、家族の中の不平等が確立すると。で、一旦確立すると価値観をまず家族から伝えられる。だから、一度こういうものを作られてしまうと、なかなかそれが変わらないというのが、彼の思想なんだよ。

◇**村上**　それは識字率とは関係ないですね。

◆**望月**　いや、識字率が高まった国々の間で、様々なイデオロギー的装置が各国のタイプを作ると。直系家族、子供の内一般に長男は親元に残り、親は子に対して権威的であり、兄弟は不平等であると。で、日本も入っているし、ドイツも入っている。ところがフランスは、親はほとんど子供に対して権力を持たないと。で、兄弟は全然平等で、遺産は兄弟で均等に配分されると。これは結局、識字率の高さと、家族のあり方というのがイデオロギーを形作るというのが、彼の論理なんで。だから、ドイツはもう完全に「市民社会」だなんていうけど、「いや、どうしてどうして」っていうのが彼の結論。

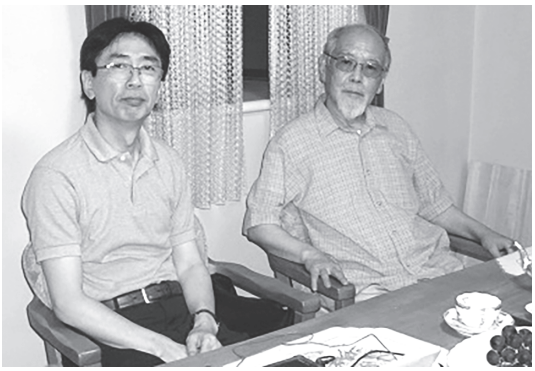
◇**村上**　現代でもですか？

◆**望月**　現代も。ここにも書いてあるよ「近代とは識字化と脱宗教化である、ところがドイツは、識字率は高まったけど、脱宗教化が遅れている。フランスはカトリックで一層イデオロギーに支配されているようだけど、ドイツのほうが、プロテスタンティズムが家族と社会のあり方を強固に決めている。」と。そういう世界把握もあるので、もうヨーロッパは「市民社会」として一律だという考えには全然たたない。結局は、文明化は識字率の向上の進歩だ、識字率が高まれば、嫌でも女性は独立して行かざるを得ない。独立して行けば家族数は減って行く。減って行くことを代償として、いわば近代化が進むと。

しかし、近代化は終わったけど、それを支えている家族構成に、今現れているイデオロギー的装置は変わっていないと。だから、経済的な近代化と、家族構成の近代化とは違う。二つ並んでいるんだよ。日本はだから、やはり依然として直系家族優先主義だと。彼はフランス人だから、フランスが優れているとは言えなくても、フランスも一つの立派な、フランス型近代化の道を歩んでいるのだと。むしろドイツよりは自由だ、父親が家族を縛らない。で、教育に熱心では無いというのはあるね、フランスは。

◇**村上**　「特殊な道」テーゼは捨てない人もいるでしょうが（J・コッカのように)、もう、ほとんど語られなくなりました。やはり、みんなにもう近代化しているという共通認識があるんでしょうね。そうなると、ドイツの近現代の歴史も、挫折した革命と言われる 48/49 年革命から、一貫して近代への道を歩んできたんだという話になってくるわけです。すると、では何故ナチズムに至ったのかということを探求していた人たちも、段々声が小さくなって行く。「特殊な道」テーゼがフェードアウトしていくと戦前の問題の責任とか何とかという問題も、段々忘

れられて行く傾向になるんじゃないか。ドイツにおける市民社会論は、「今やドイツにはそれがある」と誇る理論になる。確かにドイツの市民イニシアティヴは確固としたものがあります。何せ 68 年世代は緑の党を残しましたしね。日本のわれわれの世代は何も残さなかった。



2009 年 7 月（左は著者）

◆望月　ナチズムを選んだのも市民だという考え方があるよね、あれは選挙だからね。もちろん後で、国会議事堂放火事件で、共産党を追っ払っちゃった後で、全権委任法をあれするんだけど。今でも思い出すな。ちょっと話がずれるけど、ドイツにいた時、東ドイツに遊びに行って、クチンスキーの研究所へ行って、あのおじいさんが「この若手はなかなか勉強しているから、話が合うかも知れないよ」と紹介された男がいる。「何やってるの」と言ったら、「ナチス時代の財政史」というのをやっているんだって。で、私は「あの連中は、統計なんか勝手に書き換えて、信用出来るの？」と言ったら、「いや、信用出来るんだ」と。「ドイツの統計なんだから」と。全然疑いを持ってないの。

◇村上　さすがにドイツ人（笑）。

◆望月　だから、何を言いたいかというと、結局、ナチスは、それはちょっとはずれてはいるけど、やはり彼等は選挙で段々大きくなってきて、最後は全権委任法をやったけど、全権委任法もまた法的には何ら瑕疵性がないんだよ。議会が「我々の権利はヒトラーに委ねよう」ということを自分で決めたんだから。だから、結局、市民的かどうかと言うんじゃなくて、ナチス全体が反市民的と言うんじゃなくて、それを持ち上げた市民の中の、イデオロギー的な背景というのを分析するほうが先だろうということだね。

◇村上　1930 年代、市民社会的な様々な団体・グループが組織されて、それが上からであれ、自主的であれ、組織されて、これがナチズムを支えた。だとすると、市民社会を支える民主主義的な国家の役割は大きい、というのがドイツ社会民主主義の考え方です。ここが面白いところで、ちょっと他の国とは違うかなと思います。

◆**望月**　アメリカ人なんかは、そんな議論を聞いていると、「何馬鹿言っているんだ」と。

◇**村上**　連邦議会の諮問委員会でも、「市民参加の将来」という諮問委員会が出来て、こんな分厚い報告書にも書いてある。「国家の役割」と。それは、その当時は社民党が政権を取っていた時だったので、その意向が反映されていると思うんですけどね。それは、やはりナチズムの時の市民社会が、ナチズムを支えるものになって行ったということへの反省ということなんです。

◆**望月**　やはりそれは、そうなるとやはりエマニュエル・トッドじゃないけれども、家父長主義的な権威主義に凝り固まった市民社会という。

◇**村上**　そこから新自由主義的に脱却しようというのが、シュレーダーだったのかなと思ったら、さすが社民党、そこは踏みとどまりますね。そこのイデオロギー的な枠組みは何とか保持しながら、自発的社会参加としての市民社会を唱えるということです。もっともそれは社会国家の負担減のため、という下心もありますが。

◆**望月**　むしろ、今の日本なんかを見ていると、市民社会と国家というのは、ほとんどもうどこから区別していいのか…

◇**村上**　そうなんですよ、今の日本の NPO・NGO というのは、多くが国家の支店・下請けみたいな。だから、日本の NPO の構造を細かく分析したら、多分ハーバーマスのいうような「生活世界の植民地化」に対抗しうる市民の団体なんて少ないでしょうね。まあ、私は中野敏男さんのように市民ボランティアの「システム補完」をきびしく批判して峻別するつもりはありませんが。

◆**望月**　昔、アメリカの歴史小説家みたいな人が書いた、「ドイツの小さい街」という小説を読んだことがある。それはドイツのヘッセンかどこかの、あの辺りの本当に小さな、ドイツの村と言ってもほとんど街みたいな構造になっているでしょ。真ん中に広場があって、畠があって。その街に如何にナチスが入ってきて、段々と街全体をナチス党の支配下に置くかという過程を書いた小説があった。

いろんな家族的な繋がりが、小さな街だからあるでしょ、その家族を、まずこの父親をやっつけて、その弟をこうナチス党化して、その奥さんの妹をなんていうふうにして、その家族の網の目を辿ってね。それはどこでもそうかも知れないけど、いきなりわあわあ宣伝して党旗を

振るというのではなくて、共同体の網の目の中にナチス支配を拡げる。で、途中から、「この勢いに逆らっていると、今にとんでもないことになるぞ」という脅かしを含めて、段々と最後にオセロみたいにその街を、もともと反ナチスだった街をひっくり返しちゃう。

◇**村上**　ですから、その時点、1980 年代までは言えるんですけど、なかなかその、特に西側先進工業国での市民社会論の説得力となると。

◆**望月**　別に私はトッドを信じてはいないけど、単に経済的に等価交換というだけではなくて、等価交換を支えている共同体のイデオロギーというものに注目しているところが私は面白いなと思っている。

◇**村上**　その意味では先生、それだと、等価交換の原理というものが、いくら浸透してもイデオロギーはなかなか変えられないということになりませんか。

◆**望月**　そうじゃなくて、等価交換の原理が実に表面的だということですよ。等価交換の原理が浸透して行けば行くほど、「俺とお前は平等だ」と、「俺の意見は、君の意見と違うが、俺は君の意見を尊重する」という、そういう中で関係が進化して行くわけでしょ。そこまで進化して行けば、正に等価交換関係とは別の意味で市民社会化と言えるかも知れない。しかし、「俺の顔潰すのか」とか、同じ等価交換をやっていても、「俺の言うことを聞かないと、取引先締め上げるぞ」というような構造が、アメリカでは考えられないわけで、やはりドイツや日本というのは、そういうところの街のボスみたいなのがいて、それが、一手に公共事業を配分しているという、そういう構造が市民社会だと言えるかということですよ。

◇**村上**　まだまだ、そういう点では日本も市民社会という言葉で語れるような近代はきていないということですね。

◆**望月**　そういうことですね。私はまだ、つい最近まで少なくともそうだった、自民党支配の下では、あれに睨まれたら、街では暮らして行けないという構造があるでしょう。アメリカは、暮らして行けるかも知れないけど、気分悪いから他所の街へ行っちゃうということになって、残った街はそれで純化されるかも知れないけど、恐らく、そういう構造が残っていれば、経済的には他の街に何時かやられてしまう。アメリカは、反進化論信者があれほど多くなければ、私はアメリカを絶賛するんだけどね。

何て言うか、ニューヨークでサブプライム証券なんかをごちゃ混ぜにして売っているやつ自身も、反進化論者だったりするわけだよね。63%が。彼等だけが合理的とはとても思えない。

Ⅲ-5. 市民社会論と現代社会

ここまで「望月清司先生に聞く」（専修大学社会科学研究所月報 2011 年 4 月号、No.574）に掲載されなかったインタビューの一部分を、テーマに沿って改めて浮上させた。以下では「望月清司先生に聞く」および清華大学・南京大学での望月講演の準備過程で交換したメールのやりとりを紹介する。

2010.4.9.　望月→村上

こんどのメールで、きみの、一種の焦りみたいな心象風景が、いつもより高いトーンで浮かび上がってきました。ぼくはハーバーマスの「コミュニケーション行為」論なるものをよく知らないけれど、彼はそれが紛れもなく「近代」の特徴的産物だ、ということを明確に自覚しているのかしら。まさか、ドイツ中世都市の「都市の空気はひとを自由にする」（Stadt macht frei）を、文字通りに受け取っているんじゃないだろうね。「近代は＜農村と都市の Gegensatz＞から生まれた」というマルクスの歴史認識を、どの程度消化しているんだろうか。

奴隷主と奴隷の「コミュニケーション」なるものが成り立たない（「会話」はあるだろうけれど）、同じように封建領主と農奴とのそれも成り立たない。根源は、「自分の労働の所産の等価交換」なのだ、ということを、彼がどのくらい意識しているのか、何を読めばそこらがわかるのか、教えてもらいたい。彼の『道徳行為とコミュニケーション行為』（岩波書店）というのを、パラパラとめくって見たが、彼が挙げている思想家・理論家のなかには、近代イギリス人の名前は一つも出てこないね。ここで「近代イギリス人」と言うのは、象徴的にはロックだ。スミスの名が出てくればもっといい。

いつだったか、ハイデッガーを読んだときの感想を、彼は仏教を意識したことなんかないんじゃないか、と言ったことがあるよね。アメリカに亡命してからのアドルノが、ドイツの生活を恋しがって、アメリカの大衆文化、たとえばジャズやハリウッド映画を「クソ」みたいに嫌っていたという話から、ユダヤ人の彼をすらとらえて離さない、静謐なドイツ近代を、夢にも疑ったこと（歴史反省的に捉え直すこと）がないんじゃないか、と思う。

「『近代』をポジティヴにとらえるべきだと言うと、「それはユーロセントリズムだと反論されます」と、きみは言ってたが、そういう安易な反論者は、たとえばドイツに移住してきたトルコ人が、帰省はするけど、絶対に故国に籍を戻そうとはしない、という事実をどう考えているんだろうか。

「オスタルギー」という面白い言葉に接したとき思ったのは、「DDR も、あれはあれで＜近代＞だったのだ」ということだ。同じ「東の社会主義」でもロシアとは決定的に違うということを、ハーバーマスはどのくらい意識しているだろうか。

問題の、〇〇さんの本をめくってみて、きみの言い方を借りると「何じゃ、これは」と呆れた。「非欧米中心的な社会思想」を確立するために、紀元前 3 世紀のインドのアショカ王が女性や奴隷を含んでの「基本的な自由」を尊重していたとか、「聖徳太子の『和の精神』を現代に活かして」東洋の思想的根源を再評価すべきだ？？？？

ま、いいじゃないか。『アソシエ』だったかな、的場昭弘くんと京都の佐伯さんとの対談を読んだが、佐伯さんは的場くんの挑発に乗らず、至極穏やかに「市民社会論に希望があるんじゃないか」と言っていた。太鼓を叩いて賑やかしをやってくれてると思えば、腹も立つまい。

山之内（靖）さんも、イラクやスーダンの人々（あるいは現代中国人でもいいが）を相手に「めざめよ」なんて言えないだろう。乗ってるビール箱を蹴っ飛ばされるのが落ちだ。どこかの国の、何かの団体が「地球破滅時計」なるものの針を「いま 11 時 45 分だ」とか、「最近、11 時半までもどった」とか、針を勝手に動かしているのをＴＶで見たことがある。「いい気なものだ」と思う半面、世界の地域別に「市民社会化時計」を並べて見たら面白いだろう、とも考えた。朝日の 4 月 6 日付けの記事「出雲　挑んで知った怖さ」というレポートはちかごろ出色だった。竹下・青木なんていうのは、出雲の名家「田部（たなべ）家」の番頭だ、という。その構造は、現在も微動だにしていないそうだ。「各県別の時計」が欲しいくらいだ。思い出した。この前の衆院選報道で、「（長崎県）島原では、自民党の非支持者は隠れキリシタンのように、うわべを装っていた」とか。

中国南部の工業地帯の賃金が、最近どんどん（2 割近くも）上がっているそうだ。原蓄丸出しの企業が倒産続出という。政府の内陸部振興政策のおかげで、帰省した労働者（農民工）が戻ってこないからだ。田舎に仕事があれば、1 日 13 時間もの超低賃金労働でだれが働くものか。で、その政策の根源はどこにあるかと言えば、年間 2 万件もに達しようという「農民暴動」以外には考えられない。

この自然発生的な「暴動」（むろん政府側の言葉）、つまり「価値どおりに賃金を払え」という要求、「資本の文明化作用」の果実にほかならない。

という意味でも、「後期マルクスは反省した」という言説を、ぼくは信用してないのだ。

そして、ここでだいじなのは、農民工たちの「価値どおりに支払え」という要求は、今や年収 1 万ドル水準に近づこうという、沿岸部の都市民の生活を自分の目でみているからだ。「めざめよ」なんて旗を振らなくても、構造が目覚めさせてくれる。そういう徴候をしっかりとくまなく集め、その根源を分析すること。それが物書きの務めだ。そういう意味で、「経済過程に基

づいた市民社会論を」というきみの「焦り」は、まったく正当なものだと敬意を表したい。

というわけで、きみが頑張ればいいので、ぼくの出番はもうないよ、という気持はまだ動きませんよ。新論文を楽しみにしています。

2010.5.4.　望月→村上

インタビューの3回目をプリントアウトし、これまでの3回分をまとめて読んだ。そこで改めて、きみが、ハーバマスや、山之内さんらに対抗して、何かしら実践的な問題提起をめざしている、という空気が惻々と迫ってきた。ぼくが、きみの「挑発」に一向に乗らないので、きみがイライラしている様子も、だ。

「ａｔプラス」という、奇妙な名前の雑誌を、これまで2冊とった。まじめな雑誌だ。第2号の特集「21世紀の市民社会」で、見田宗介＋大沢真幸の対談のタイトルは「名づけられない革命をめぐって」だ。おしゃべりの内容は、ふわふわした綿菓子みたいだが、「名づけられない革命」という言葉で、丸山真男が「民主主義は終わりのない永久革命なんだよ」と言っていたのを思い出す。

労働に基づく等価交換のゲゼルシャフト（＝結合する「行為」だ）の歩みは、近視眼で見ると、まったくいらいらするほどの亀の歩みだ。進んだり、また思い直してあと戻りしたり。ナチス帝国みたいな横道にそれたり。

バングラデシュの農村で、例のマイクロ・ファイナンスを使って、市場で売れる生活雑貨を作っている主婦たちが、自分たちで市場へ製品を運ぶオンボロ自動車を買う工夫をしている、というニュース。バングラデシュはインドよりも、もう一段貧乏だけれど、インドの小型車ブームもやがてバングラデシュに伝播するにちがいない。「資本の文明化作用」の例証を見る思いだ。

中国は建国60年で、世界最大の自動車市場になった。日本の明治維新から60年といえば1928年。ぼくの生まれた年の1年前だ。2歳か3歳のころ、生まれた吉祥寺から中野へ引っ越しするので、自動車に乗ったかすかな記憶がある。小学生のころ、夏休みになると静岡県の興津という、母の実家の町で暮らした。国道1号線を横切って、海へ泳ぎに行った。馬車や牛車がのんびり荷物を運んでいたが、自動車が走っているのを見たことがない。小さな子供も平気でよちよちと横断して海へ出た。親も「危ないよ」なんて言わない。歴史は民衆が作るのだ。その民衆は、スミスではないが、「神の見えざる手」で自分の気付かないうちにゲゼルシャフト化されて「市民」になる。黙っていても、「このシステムはおかしい、けしからん」と動き出すのを、われわれ物書きは、しっかりと見据えて記録に残せばいい。「上から目線」で、「おくれた大衆を何とかせねば」というのは、思い上がりか自己満足か、物書き市場で目立ちたいという欲求か、のいずれかとしか、ぼくには見えない。

昔、専大経済学部にいて、京大に移った木崎くんが訳した『ガレー船徒刑囚の回想』という岩波文庫をふと手にとって、昔読んだときを思い出した。1699 年、フランスの片田舎でユグノーだった平凡な青年が、カトリックへの強制改宗を拒んで逃走中につかまり、「終身徒刑囚」にされる話だ。1757 年まで、なんと 12 年間、ガレー船の船漕ぎ奴隷の生活を生き延びた。ほんの 250 年前のヨーロッパで、だ。イスラムを笑えない。

それから 100 年たった 1861 年に、アメリカの南北戦争が始まる。それからまた 100 年たって、マルティン・ルーサー・キング牧師が出た。マルティン・ルターだったんだな、彼は。それからまた 50 年でオバマだ。

明治維新を人生の半ばに見た福沢諭吉は「一生にして二生を生きた」と言った。ぼくも同じだ。1945 年を境に、二つの社会を生き延びてきた。まっくらな夜空のはるか上空から、姿を見せずに「オンオン」というＢ29 爆撃機の編隊音を聞きながら「この戦争もいつかは終わるのだろうか、それまで生き延びられるだろうか」と暗澹たる絶望にひしがれたのが、16 歳のころだった。

どんなに貧しくても、食べてゆかれるだけで幸福だ、という思いで 1945 年以後の 60 年以上を生きてきた。「ａｔプラス」の 2 号で、一橋の吉原直毅という人が、労働価値説に立たないマルクス経済学を「新厚生経済学」という名で披露している。労働者の「ベーシック・ニーズ」を満たせるか否か、という指標で「搾取」を論ずる、という姿勢だ。近経タームはよくわからないが、全体として希望が持てた。

そうなのだ。「ベーシック・ニーズを満たせない資本主義は去れ」と要求する民衆は同じように「ベーシック・ニーズを満たせない社会主義も去れ」と要求するだろう。『墓標なき草原』（岩波書店）を読んで、人を殺す楽しみを人民に教えつけた社会主義をどう評価すればいいのか苦しむけれど、「やっぱりこれは原蓄なのだ」と無理矢理にでも納得するほかはない。死屍累々でない歴史なんてあるのか。

ぼくの役割がまだあるとすれば、「マルクスには市民社会論なんて無かった、論証はこれこれ」と、『マル・エン全集』から勝手な引用するやつがいたら、静かに「あんた、まちがってるよ」とアドバイスすること、これだ。同じ『at プラス』で、おなじみ柄谷行人が「社会主義の目的は、賃金の廃棄と国家の廃棄、ここにある」と言いながら、『マル・エン全集』版の「ドイツ・イデオロギー」から、例の「ひろがりつくした世界分業」を、論証もなく「マルクスは言う」と引用している。これで「世界共和国」と言うのだから、こんな議論をする人を尊敬する人がいるという、「まだまだ」の歴史水準なのだ、今も。

ついでに。内田義彦系譜の市民社会論を「生産力主義だ」と非難する連中に対抗して、「そうじゃない」ときみは言いたいのだろうが、今となっては「生産力主義」（こういう決めつけ方

自体を批判してやらねばならぬが）は、褒め言葉だと思えばいい。「生産関係主義」よりは、10倍も100倍もましだろう。

その系譜を引くぼくを、暗闇から再顕彰しようというのが、きみの狙いなんだろうが、ぼくにかまわず、「村上市民社会論」を自由に展開すればいい。

2011.6.7.　望月→村上

市民社会論には「階級闘争の分析がない」とか、「国家論がない」というような批判がありました。そこで似たようなご批判をいただくかも知れないと思い、あらかじめ小生の「反論」を知っておいて頂きたいと考えて用意したのが、あのメモです。

そういうわけで、あらかじめ文章化された原案はありません。あの「メモ」を共通の話題として、「ここはどういう意味か」というようなご質問、または、「国家を政府に矮小化するのは間違いだ」というようなご批判があった場合に、小生の考えを、より詳細に述べるための「手がかり」のようなものです。

たとえば「市民社会と『資本主義』」というプリント※に示した、あの重ね餅のような「市民社会」の概念図を説明させていただければ、「マルクスの市民社会」を、いっそうよくご理解いただけたかも知れません。

「市民」は、重ね餅を最下部まで貫通する「大工業」の門前で、資本家と雇用＝被雇用の取引をし、契約が成立すれば、工場の門（エレベーターの地下階のような門）をくぐって「労働者」になります。理論の究極では、賃金は「日払い」ですから、一日の労働を終え、賃金を受け取って工場の門を出ると、そこは市民社会で、かれは一市民にもどるわけです。

友人とバーで一杯やりながら、ひいきのサッカー・チームの不振ぶりを歎いたり、もっと良い条件の勤め先はないか、あれこれ情報を交換したり、娘の誕生日のためのケーキをデパートで物色したり、大学の夜間部の授業に出たり…。

つまり市民社会とは、利己的な交換市場であるとまったく同時に、常に利己的であるとはかぎらない多様な gesellschaftliche Beziehung der Personen の場である、というふうに考えます。

この「場」がなければ、明日の朝また労働者になる市民は、グラムシの言う「政治社会の（イデオロギー的な）ヘゲモニー」に抗する力と知恵をついに持てない。脅し半分の情報に丸めこまれて、資本家の言うなりの条件で gesellschaftliches Verhaltnis der Sachen を結ばされるのです。グラムシはそこに「有機的知識人」の果たすべき役割を見ました。

2011.6.7. 村上→望月

先生の文章について質問があります。

私の理解では、市民社会とは基本的には「生産と交換＝分業」の関係であり、資本主義的な生産様式下でも、資本家と労働者の間には労働力の売買（＝交換）において、また工場内の直接的生産の場（労働過程）において、階級関係の基底に市民社会関係が存在し、かつ工場外では市場での生活物資の購入（＝交換）において市民社会関係が存在している、というものでした。

工場の門を出てバーやデパートや大学夜間部のような「自由時間」における市民的交通・生活様式は、上記「市民社会」を基底とした第二次的な文化の次元ではないかと思うのですが。もし「常に利己的であるとは限らない多様な社交的関連」を、利己的な交換市場と「全く同時に」「市民社会」であると規定すると、それはハーバーマスのいう「生活世界」と重なります。この「生活世界」とも重なる市民的生活様式は、第一次的な市民社会関係があってこそ、可能になるのではないでしょうか。生産と交換関係としての市民社会と、友人とのバーでの情報交換の場としての市民社会は、「同時」＝「同次元」でよいのでしょうか。

2011.6.8.　望月→村上

うーむ、なるほどー。

〇〇さんのグラムシ論に、「市民社会」語が一つも出てこない、ということは前に話したよね。ご承知のように、グラムシは、イタリア特有の状況だが、カトリック教会が単に信仰の場面でばかりでなく、学校や福祉の面でも「市民社会」にイデオロギー的権威を確立していることに「感動さえおぼえて」、ここを占拠しなければ労働者階級は勝てない、と認識していた。それがグラムシ再読（『現代の君主』青木文庫）で、あらためて頭に焼きついていたんだ。

それともう一つ、〇〇さんから「市民社会は交換だけの世界なのか」と質問されたような気がして、なんだか、それへの回答という意識に引きずられた。まったく、君の指摘のとおりだ。「マルクスの市民社会概念」への立脚を堅持するなら、「分業と交通の中で、「ひと」（das Man だな）は鍛えられて市民になる」という見地を、「それでは狭すぎる」と批判されようと、原点を断固固守すべきだった。

ただし、君の指摘のうち、「工場内・労働過程」においても、基底に市民関係が貫通しているはず、という部分には「ぎょっ」とさせられた。たしかに、市民として工場の門をくぐるのだが、この生産関係にいったん繰り込まれれば、まさしく「大工業の死活的メカニズム」が働いて、＜市民社会でないゲマインシャフトから強制的に投入されてきた労働者であろうと＞、いや応なく「類的人間」（この場合の「類」は労働者仲間）として陶冶してしまうのではないか、とも思われる。もとが「市民」だから、というのは予定調和的という気がしないでもない。

…いや、それはまずいか。ゲマインシャフトから強制連行されてきた労働者も、一応は、重

ね餅市民社会にとりあえずは編入されていなければならないからね。今朝、他国から港に運ばれてきて、そのまま工場へ直にほうりこまれた、としてもいずれ終業後は「市民社会」に放り出されるのだし。…うーむ、このあと、どう整理したらいいのか、まとめられずにいる…

とりあえず、「市民社会の一員」という属性は労働の現場では後景に退いている、というふうに捉えられないだろうか。この問題は、もう少し考える時間をください。

そもそも、あの重ね餅図がまずかったのかな。あの図では、「労働力の売買」と「消費財の売買」だけ注記しておいたんだが、ぼくの中で十分に決着をつけないままでいた「コミュニカティヴな生活世界」を、韓さんへのメールでは無反省に組み込んでしまっていたんだね。

どう純化したらいいんだろう。君自身の研究の時間を奪ってはすまないから、ふと閑な時間ができたとき、なにか智恵を貸してくれたらありがたい。

2011.6.9. 村上→望月

メールを2通いただきました。ありがとうございます。前便に対して感想を書き、もう少し考えようと思って「下書き」ファイルに入れておきましたところ、先生から次のメールが来てしまいました。ＮＮＲ（返信無用）ということですが、先生からメールをいただき、こちらが質問するのは、それ自体、私にとって「勉強」になりますので、返信をさせていただきます。

まず、前便に関してですが、「重ね餅」図は資本主義における「構造」図で、今回の先生の新たな概念図バージョンですね。私は、それ以前の三段階図（先日のプリントでは「Ⅲゲマインヴェーゼン・ゲマインシャフト・ゲゼルシャフト」）の方に、やはりなじみがあります。その最下層の「労働と交換の体系」としての市民社会、先生はこれをまず基本として押さえておられます。さらにその上に歴史的現象としての商品交換関係が乗っかっています。

市民社会をまずは「労働と交換の体系」として理解するのは、いわゆる「市民社会派」の共通項であり、高島、大河内以来、おおむね一貫しています。そのうち特にマルクスに依拠しながら労働過程に力点を置くのが内田義彦氏であり、交換過程に力点を置くのが望月先生だというおおざっぱな整理については「市民社会論の今日的論点」で書いたとおりです。

まず市民社会概念における労働過程の側面では、原理的に対象認識の深化と大工業段階における労働者の適応（合理的認識力形成、ここに夜間学校も入るか）について、内田義彦先生が明らかにされました。そして市民社会概念における交換関係の側面で、望月先生が抽象的原理の上に歴史的具体像（中世の市民社会）を重ね、さらに「工場の門前」での資本主義下での市民社会についてイメージを確定されたと思います。この「工場の門前」における市民社会的関係については、高島、内田においても「価値法則の世界」として表象されていました。この市民社会派の中で市民社会論において「交換＝分業」側面を特に重視し、かつ歴史的な展開を明

らかにされたのが望月先生だと思われます。

そこで先生が驚かれた「工場内での市民社会」ですが、直接的生産過程においても労働者は合理的認識力の形成、あるいは協業による労働の場での類意識形成が、可能性として想定されうるのではないか、と思って、そう書いたのですが、おかしいでしょうか。

さらに続いて、本日いただいた先生からのメールに関連しまして、私は、前便で書きました「労働と交換の体系」外の「市民社会」を、全く否定しません。否定したらアソシエーションを論じる意味がなくなりますので。1840 年代のドイツにおけるアソシエーションの興隆に関心を持ったとき、これを即座に「市民社会」と等値するわけにはいかなくて、どう考えようかと思いました。そこで「労働と交換の体系」としての第一次市民社会、商品交換関係の拡大に伴う伝統的社会諸関係の弛緩を背景とする、新たな社会関係の試みということにしようと思ったわけです。先生の三層構造市民社会でいくと、基礎的市民社会のうち「交換」関係の発展を契機とした市民社会というわけです。ここでのアソシエーションは、労働者たちの自己教育・娯楽の場でもありますから、ハーバーマスのいう「生活世界」も含まれると思います。10 年前の「望月市民社会論の重層的形成」を見ると、私は「労働と交換の体系としての第一次市民社会」の次に商品交換関係として「第二次市民社会」、そしてこれを基礎としてアソシエーションなどの「第三次市民社会」というふうに言っていました。あの論文でよかったかどうかは、「対談」をさせていただいたあとの現在、再度自分で検証しなければなりません。

アソシエーションの位置づけに関しては、ハーバーマスの『公共性の構造転換』段階だと、私はハーバーマスの見解を支持します。彼がその後、フランクフルト学派の真骨頂を発揮し始め、さらにアーレントの刺激もあったのでしょうが、近代における道具的認識というやつで、労働・交換関係を理論上棚上げし、生活世界のコミュニケーションを基礎として、わが市民社会論を切り離したところで、ついて行けなくなります。

では「生活世界」とは何か、となるとこれは曖昧です。ハーバーマス論の日本語で読めるものはどれも入門書の体裁を取っているので、これらを正面から扱うのにちょっとためらうのですが、いくつかあげてみると、まず先生から教えていただいたＪ・Ｇ・フィンリースンの『ハーバーマス』では、「生活世界とは社会生活の非公式の、市場化されていない領域を表す名前である。例えば、家族と世帯、文化、組織化された政党のそとにある政治的生活、マスメディア、自発的な組織体などがそれである。」（82 頁）しかし「政治的生活・自発的組織」はもうすでに公共性 Öffentlichkeit の領域ではないかと思いますが。小牧治・村上隆夫『ハーバーマス』（清水書院）「社会的な行為の基礎である文化伝承と社会連帯と人格統一を支える領域」（126 頁）。中岡成文『ハーバーマス』（講談社）「だいたい、生活世界という言葉を使うとき、それによって告発したい対象（多くはシステム）は多少とも明確であっても、批判の足場になっているそ

の概念自体の意味するところは、あるいはどのような社会領域が生活世界にはいるのかは、必ずしも一貫して明瞭に想定されているわけではない」(134 頁)。

という具合で、最後の中岡氏の本など「第三章　システムと生活世界」と銘打ちながら、この程度です。小牧・村上は何を言っているか分からない。フィンリースンが最も具体的ですが、これすら「公式でない、市場化されていない」という消極的定義でしかなく、これを形容詞として「市場化されていない文化、マスメディア、自発的組織」ということになり、これまた実は不明瞭なのです。

つまり、誰もろくすっぽ分かっていないのです。自分でも彼のテキストで「生活世界」についてじっくり調べないといけないですね。しかし「生活世界の植民地化」というフレーズを見ると私など「そうだよなァ」と思ってしまいます。ハーバーマス・マジックです。いずれにせよハーバーマスは「生活世界」を設定することで、「労働・交換世界」から足を抜いたところで「公共性」領域を構想するということになっています。

ですから先生のメールにありましたように、工場の外で、「労働力再生産の領域」とそれ以外の「生活世界」を分けなくてもいいのではないでしょうか。なにせ家族をとってみても、それは純粋な愛情に基づく「生活世界」であるとまったく同時に「労働力再生産の場」であるわけですから。曖昧模糊な生活世界というシステム外の領域は、労働と交換の体系の外にある市民的社会（交通）関係の領域に含み込んでいいのではないかと思うのです。

これに対して、労働と交換を基礎とした第一次的「市民社会」から商品交換関係一般化を経たパブや自由時間における市民的交通関係、そして現実の市民運動を展望する「重ね餅」市民社会論は、ハーバーマスに堂々と対抗できると思っています。

ＰＳ．こう考えながら、ただ一つ、「市民社会派は生産力主義だ」という批判に対して、どう対抗するか、私にとって分からないところです。内田義彦氏は「生産関係の問題だ」と言いますが、それだけではまだストンと胸のつかえが落ちない感じです。この批判に対して、どう対抗すればいいのでしょうか。

2011.6.9.　望月→村上

『専大経済学論集』が届いたので、何度目だろうか、君の「市民社会論の今日的論点」を拝読させてもらった。

先日、君に叱られたので、また新しい目で読ませてもらうと、こういう疑念が湧いてきた。ハーバーマスの「市民」て、どんな人たちだろうと。ネットで、「ドイツ　職業構成」で見ると、日米独のそれぞれ特徴はあるが、ドイツが特段変わってるわけではない。

すると、彼の「市民」も、月曜から土曜までは、さまざまな分野での労働者にちがいない。

言い換えると、月曜から土曜までは、午後 5 時〜8 時ごろから「市民社会に戻」ってきた人たちなのだろうか。

そこで、あらためて「市民社会」を、労働から切り離された「生活世界」とだけ規定するのではなく、第一義的には、「労働力の再生産の場」と規定しておいて残るのが、とりあえず無概念的な「生活世界」と考えるべきかな。

「労働力の価値」は、生物学的に力能を再生産し、2 人の子供を次代の労働者として教育し、家族の「文化資本」を一段でもアップするだけの費用だ。一国レベルでは、それなしには、大工業それ自体が衰弱してしまう。

むかし、改造社版『剰余価値学説史』を読んだとき、「教師も剰余価値を作り出す」という一節が頭に残っていたが、ＭＥＷが出てから古いのは捨ててしまったので、もう一度パラパラめくって見た。

「剰余価値を生む」は見つからなかったが、「教育サーヴィスは労働力の生産費または再生産費である」と明記してあった（マル・エン全集 26 巻Ｉ、180 ページ）。ということは、学校は「労働力の再生産の場」には不可欠の 1 要素なんだ。グラムシのカトリック学校とは、まったく別の次元で。

〇〇さんが、毎朝 6 時半起き、朝飯抜きで娘さんを学校へ送る、というのも、文化資本維持またはアップという、「労働力再生産」の営みと言えないかな。君に叱られた「終業後に大学の夜間部へ通い…」も、同じかも。

で、ハーバーマスの「生活世界」だが、そこから「労働力の再生産」時間をマイナスしたら、残るのはどれほどの「自由時間」で、どんな「生活」なんだ？　という疑問が生じた。「バーで友人とサッカー話し」はここに属するか。

ゲッチンゲンなんかで暮らしていたから、ドイツの「勤め人」たちの満員電車通勤なんて知らないですごした。今も、夕方 5 時になると、いっせい退社するのかな。

『直接的生産過程の諸結果』（国民文庫）には、「教師が他の教師とともに、ある学校に雇われて、この知識を商う学校の企業者のために貨幣を…増殖するならば、彼は生産的労働者である」という一節がある。医師は「労働力の修繕者」だ。

6.10.　望月→村上

何かと忙しいだろうに、気楽な隠居のおしゃべりに、まめにつきあってくれてありがとう。済まないね。だんだん、おもしろくなってきた。

「工場の外での、労働力再生産の領域とそれ以外の「生活世界」を分けなくてもいいのではないか、という君の意見は、ぼくにとっては好都合だけれど、討論会をやったりデモ行進した

り、という「市民運動」または「市民参加」の場は、まだちょっと、労働力再生産とはひとあじ違う領域なんじゃないか、という気もする。どうかね。

そこで、君の「労働と交換を基礎とした第一次市民社会、商品交換の一般化を経たパブや自由時間における市民的交通関係（第二次か）、そして「現実の市民運動」（第三次か）という、三層重ね餅イメージだが、こうも考えられないか。

「労働力の再生産」とひとくちに言っても、現実には、多大の時間を必要とする。勤めの帰りに、新橋のガード下の焼鳥屋で一杯、というだけじゃ済まない。あれこれ、具体例を挙げたらきりがないから、要するに「家事のすべて」だ。日本的感覚じゃ、月曜から土曜までは、それでいっぱいいっぱいだろう。

そこで「日曜日だ、生活世界だ」、または「日曜日には公共圏へお出かけ」という、からかい文句を考えてみた。（長ーい休暇はこのさい考慮外）

すると、この週の 7 分の 1 を際立たせるには、三層構造より二層の方がよりインパクトに富むんじゃなかろうか。7 分の 6 を「労働と交通の世界＝労働力再生産の領域」とし、パブや自由時間での交際も、ここに含めちゃう。

もっとも、このからかい文句を、いっそう効果あらしめるには、そもそも、「国家と経済の中間域としての市民社会」という 3 階論そのものを、バラバラに分解掃除しなくちゃ議論はかならず小化してしまう。相手の土俵に乗ったまま論争しても始まらない。

ハーバーマスをそこに含めていいのかどうか、はっきりしないけれど、とにかく「ドイツの思想家の宿痾としての国家依存思想」（中国シンポ・メモの最後のページ）に、彼もそれと知らず骨髄を冒されていないかどうか、仔細に検討する価値はあると思う。これは単なる感じにすぎないけれど、イギリス人やフランス人は、こういう「国家のゴジラ化」はやらないんじゃないか。まして「北部は独立しよう」なんて公然と議論するイタリアにおいておや。

【補足】望月 2011 年 6 月 7 日のメールに出てくる「「市民社会と『資本主義』」というプリント」とは、清華大学・南京大学での講演のために望月が準備した資料の一部分である。参考までにそれを掲載しておく。

最後に：「市民社会と『資本主義』」

さて、最後に、私の市民社会観で言い残した、いつくかを箇条書きにして見ます。
あくまでマルクスの歴史理論から見た「市民社会と資本主義」であって、現在、ひろく論じられている「市民的公共圏論」その他については論ずる資格はありません。ご了承頂きたい。

★「共同体→市民社会→社会主義」という歴史理論の確認

① 本源的ゲマインシャフト＝人格的依存関係のゲマインウェーゼン

【分業と［非・貨幣的＝un･mittel･bar］交通を内包する】

→「土地領主制（奴隷制もしくは農奴制）のもとでも、この「共同体」は存続する。

② 市民的ゲゼルシャフト = 物（象）的依存関係のゲマインウェーゼン

【私的所有のヴェールの基での、分業と交通】

→ 市民社会において自由（しばしば「フォーゲルフライ」（vogelfrei）に）

→ 資本家的生産様式のもとで、「ゲマインシャフト的な諸生産手段をもって労働し、かつその多数の個体的諸労働力を、自覚的に、一個のゲゼルシャフト的労働力として支出するところの、＜疎外された＞自由な人間たち」

③ 社会主義＝自由人の自覚的ゲマインシャフト（というゲマインウェーゼン）

【「諸個人の普遍的な発展（能力と知性の開発）」の上に立つ】

→「ゲマインシャフト的な諸生産手段をもって労働し、かつその多数の個体的諸労働力を、自覚的に、一個のゲゼルシャフト的労働力として支出するところの、自由な人間たちの一個の連合（ein Verein）（『資本論』１巻１章４節）

※「未来のアソシアシオンでは、市民社会は解体するのか？」という疑問に：

a. マルクスの「未来社会論」は、あまりに多様かつ楽観的で理論分析に堪えない。

＊「朝には狩りを、昼には魚釣りを」を夢見るなら、話は別である。

b. 市民的分業＝交通の継受なくしては、いかなる「社会」も存続できない。

c. なぜなら、資本家社会のポジティヴな遺産を残りなく受け継がねばならないから。

★「市民社会と資本主義」の関係

①「資本主義」という、いわば「流通語」の定義次第。「資本主義はすべてを包摂している」と考える人には、この設問自体が無意味。「資本家的生産様式が支配する諸社会」（『資本論』冒頭）の「諸社会」をどうとらえるか、という問題意識が必須。

②『ドイツ・イデオロギー』（うちマルクスと推定できる部分）では、「全歴史段階に存在した生産諸力に規定され、逆に規定しかえす交通形態」、これが『市民社会』でした。「歴史のかまど」です。私の市民社会観の、一つの強力な「みちびき　の糸」となったもの。この定義自体の中味はあとから埋められてゆく。

＊「リスト評注」（ＭＥＷ補巻１：訳 109）（1845 年 3 月ごろ）。

「アダム・スミスが経済学の理論的出発点だとすれば、この経済学の現実の出発点、その現実の学校（Schule）は、「市民社会」であって、経済学のうちに、この「市民社会のさまざまな発展段階」を正確にたどることができる。」

③ ゲゼルシャフト化された個人たちの自由な分業と交通形態。一見スミスの「商業社会」と酷似しているが、違うのは、この個人たちは「大工業」の門前で、資本家と対等に賃金を　交渉したあと、工場内に入り「協業と分業」を現実的に主導し得る「類的能力」を備えた諸　人格でもある、という認識。

＊能力以下の労働を強いられていた技術者たちの「スピンアウト」（脱離・自立）による、資本の本体の瓦解。（情報産業で日々生起している事例）。

④ 市民社会は、内部から手工業→マニュファクチュアを経て「大工業」を産みだす。しかし、市民社会それ自体が、全面的に大工業に転化するわけではない。

＊平田清明「市民社会は、日々、資本主義社会に転回する」。不可解。

⑤「資本主義」＝「市民社会を不可欠の土台とした、大工業＝資本家的生産様式」。

a. 大工業は、生産財・消費財を「市場」で購入し、販売する。

b. 大工業は、労働力の継続的な補給＝購入を必要とする。

c. 労働力を購入する場は、資本家的生産様式を包みこむ「市民社会」しかない。

d.「大工業は、単能労働者を、さまざまな社会的機能を操作できる『全体的に発達した個人』に換えることを、自己の『死活的機能』とする」（『資本論』1 巻 13 章 8 節（ｅ）

……労働者の多機能化には市民社会での自己開発が必須。

＊プリント「市民社会と資本主義」、「土台と上部構造」参照

＊グローバリゼーションの問題は、別の問題領域。

★「市民社会は、結局、私的所有者の社会にすぎない」という批判に対して：

① そもそも、私有者にならないとゲゼルシャフト的存在になれない。

「私的所有」は、いわばゲマインシャフトから脱出するために必要な要件。

② 労働者は「労働力という商品」の私的所有者として、工場の門の前で、資本家と「取引き」する。売らない自由をも持つ。

＊問題は「労働力の価値」（夫と妻の家庭における、労働者の労働力の再生産。最低二人の子供の教育費）＝再生産のため総資本が要求する水準である。

＊理論上、「労働力の価値」は、［現状平均］生活費の合計額ではない。あくまで資本家と労働者の取引（＝実は階級闘争の一形態）で決まる。

③ 大工業の内部での「搾取」というヴェールの下を見なければならない。

＊「搾取」は、労働者が作り出した新生産物と、「労働力の価値」との差分。

これは大工業存続の基本的条件であり、未来社会でも「搾取」は存続する。

＊問題は、その「剰余価値」のゲゼルシャフト的配分にあるのだ。

④ マルクスの「市民社会」は、かくして歴史的必然の所産なのであって、スミスが『道徳

情操論』で強調したような、「共感・利他心・正義・慎慮」などの倫理的要素を論理の内部で要請しない。それらは、Beziehung と Verhaltnis の過程で事態必然的（目的合理的）に実現する。いわば「非情のゲゼルシャフト」である。

★市民社会論には「階級闘争論が欠けている」という批判に：

①「理論と時論の峻別」（内田義彦）が必要である。目前の歴史的事件にかんする階級闘争への言及は、理論的分析でないかぎり、「時論」と見るべき。

②「階級闘争」は、一義的に、総資本・対・総労働の歴史的決戦、であるのではない。

③ 市民社会における「労働力の価値への正当な支払い」、「工場内分業・協業」における「類的能力の実現」（技能・技術の正当な評価）の要求は階級闘争である。

④ 階級闘争理論はヨーロッパの労働者階級の支持を得られなかったのでは？

a. イギリスは「トレード・ユニオニズム」→フェビアン社会主義

b. フランスは「サンディカリズム」←プルードン

c. スペイン・イタリアは「アナーキズム」←バクーニン

d. ドイツでは、ラサール主義の「国家・社会主義」→ＳＰＤ→1876 年解散。

e. 結局、「第一インターナショナル」は 1872 年本部をニューヨーク移転。

★市民社会論に「国家論が欠けている」という批判に：

①「国家」とは何か。「社会」概念と同様に、議論の必要条件である、最低限の定義さえ得るのが難しい。たとえば、グラムシの「政治社会＋市民社会＝国家」では、国家は合計概念で実体がない。

② マルクスの「国家論」の一面。

＊『ドイツ・イデオロギー』（マルクスの執筆部部分）における「諸特殊利害の争いには国家という（幻想上の…エンゲルス追記？）《普遍》利害の制御が必要となる」の国家は、エンゲルスの＜共同利害の自立体＝「幻想の共同性」＞とは異なる。マルクスの国家は、価値法則の一時的混乱時に介入する調停者、であろう。（拙稿「《ド・イデ》における二つの共同利害論」1974 年、平瀬教授還暦記念論文集）

③ とりあえずの私見。

「国家」マイナス「国土」マイナス「情念／ナショナリズム」＝政府。

（人口 35000 人のリヒテンシュタイン、3 万人のサン・マリノのような「ミニ国家」にも妥当するような概念が必要だから。）。

④「政府」は、「政権」＋「官僚制」。いかなる政権も官僚制なしには成立し得ない。

＊ウェーバーは、将来は社会主義になる可能性はあるが官僚制は残る、とした。

⑤ ヘーゲルは市民社会の生む貧困（階級分裂）の解決を「政権」に要請している。

a. 市民社会は、国家と家族の中間に位置する「分裂態」or「差別態」に止まる。

b. ヘーゲルの国家分析はここで哲学の領域から逸脱して、政策論に堕した。

c. ドイツの思想家の宿痾とも言うべき「国家依存」思想。→ラサール。

⑥「偽書『ド・イデ」の結論は、「政治権力の奪取」（E 執筆）。奪取の後は？

以上

Ⅳ.「価値形態論の上着は 30 万円」論文の問題意識

望月の生涯最後の論文「価値形態論の上着は 30 万円」の原稿が私に送られてきたのは 2009 年のことだった。「発表する気はないが預かっておいてくれ」という望月の要請に、私は困惑したものだが、これは自分の死後に公表してくれという意味だということは推察できた。しかし私にはそれを忠実に守るつもりは全くなかった。すぐに発表するよう何度も勧め、これまたインタビューの時と同様、何度も断られた。そしてやっと 2018 年に承諾を得て、同年 10 月「価値形態論の上着は 30 万円」（『専修大学社会科学研究所月報』No.664、2018.10.）として公表された。この原稿は 2009 年の段階で 4 回書き直しされ、発表することを前提とした 2018 年には 7 回書き直しされているから、合計 11 回手が入っている。私自身は価値形態論について語る資格を持たないので、メール交換時は望月の意見を拝聴する一方であった。

2014 年 11 月 14 日、望月はこの論文を書いた動機について以下の長いメールを送ってきた。私に対するメールとしてはいつもより改まった表現であり、そこから察するに、いずれこのメールが（私によって）公表されるであろうことを想定していたのかもしれない。

「あの覚え書きを社研月報に公開するには、まさに「今、なぜ価値形態論か」という「まえがき」が必要です。あの覚え書きは、いつか話したように、岩井克人さんの『貨幣論』（ちくま学芸文庫）に触発されて、かねて（もう長ーい過去から）胸の底に澱のように沈殿していた思いをブチまけたものでした。貴兄も直感的にお感じになったはずですが、そもそもが、『資本論』冒頭の有名な書き出しからして、「これでいいのかなあ」という、誰にもうち明けられない恐ろしい疑問と対決しないままでは、結局は読者に真意をわかってもらえないのではないか、と思っていたのです。

今更ばかなことを、と笑われることを覚悟して申せば、資本制社会の富の原基形態である「商品」は、果たして価値と使用価値を「持つ」のかどうか、という疑問です。商品には、二つの形態があります。親会社から注文をうけて、預かった設計図に忠実にこしらえて、親会社に「納品」し、あらかじめ約束された代金を受け取る商品と、ウィンドウの中に飾られていて、「さあ、買ってください」と客に訴えている商品と。『資本論』が想定しているのは後者ですね。

いま、わたしの脳裏にある商品世界のイメージは、おおざっぱに言って二つあります。一つはあの高度成長時代の、東京湾にあった「夢の島」という名のゴミ捨て場。テレビで、新品のＹシャツの束がトラックからドサドサと惜しげもなく捨てられていた風景。もう一つは、数日ごとに深夜のスーパーで「３割引」とか「半額」のシールが順次張られてゆくのを横で待っているお客たち（わたしもしばしばその一人）です。

もちろん、「理論」というものは、そんな猥雑な「例外」まで考えなくていいので、「商品は生産者（目に見えるのは販売者）のつけた価格で売れる」という不動の前提から出発せねばなりません。だが、そうだとすると、もの不足のかつての社会主義社会で常態だったように、「今日は肉の販売日」という情報で集まった客が行列してアッという間に「売り切れ」という風景もりっぱな市場に含めねばならないでしょう。

「そんなのは『自由市場』じゃない。お金は払うだろうが『配給市場』にすぎない」と言われるでしょうが、さて、そこからが問題。商品の生産（販売）者がウィンドウに陳列している商品は「買ってもらえるかどうかわからない」から、買い手の購買欲をそそるような飾り付けをするわけでしょ。首尾よく売れた商品は、代金が支払われた瞬間にもう「商品でなくなるので、マルクスもちょっと気にして「効用」と言い換えてもいいと言っていますが、「物の効用」はかつての買い手の手元に残りますが、それは「商品の使用価値」ではなくなります。宣伝に釣られて買ってはみたが宣伝ほどの、または期待したほどの「効用」は得られなかった、という状態は珍しくありませんが、それは別の話。

問題は、ショウウインドウに飾られているけれど売れるかどうかわからない状態の、それがまさしく「商品」なるものの本質である「売り物」は、果たして「価値」をもっているのか、という疑問です。すなおに言えば、売れないかも知れないからこそ「商品」と言える。だから、「抽象的人間労働の体現としての（交換）価値」という表現（あるいは言説）は、そもそもから結論を先取りしている言い方じゃないのか、論理学で言う「乞食論法」じゃないのか。

これを明言するのがこわくて、わたしは、第一価値形態のところで、20 エルレのリンネルの所有者の姿を、「このリンネルの等価形態は一着の上着ですよ：という札を掲げただけで、ただポカンと立っているだけという「リンネル所有者」の姿を描写しました。そこからあとは、細説には及ばないでしょう。

この返事を書く前に、広松さんの『資本論の哲学』を、文庫本であらためて買ってみて、この疑問の解答があるかどうか確認してみましたが、無駄でした。そのかわりと言っては何ですが、川上則道という聞いたことのない著者の『マルクスに立ちミクロ経済学を知る』という奇妙なタイトルの本をゲット。これがおもしろかった。

現在の「制度化されたミクロ経済学」への内在的（というのは一定の条件でなら彼らにも言

い分もある、というスタンスで）批判を、労働価値説の側から展開している本です。都留文科大学で（公務員試験向けに）ミクロ経済学を講義しながら、「ほんとは、ここがおかしいんですけどね」といった注釈を加えるという、おもしろい本です。むかしは限界効用価値説に立っていたミクロ経済学は、今では「価値」論を放り出しているのに対応してでしょうか、マルクス経済学を「価値と使用価値」というふうな「原論」として展開するのではなく、すんなりと「生産価格論」を、いわば価格論レベルで説明しており、これなら学生もマルクスを理解しやすいだろうなと、感心しました。この本で知ったのですが、著者は『マルクスに立ちケインズ経済学を知る』という著書もあるらしいので、そちらも買ってみようかと思います。

すでにご承知のように、あの覚え書きは、第４形態で「金を出したらおしめえよ」というスタンスで、マルクスの「後出しじゃんけん」を、言葉の厳密な意味で kritisieren したものでしたが、最後のしめくくりで、「マルクス経済学はスコラ的な価値論をスルーして価格論レベルで展開しても（展開したほうが）いいんじゃないか」とほのめかし、その一例として「アナリリティカル・マルキシズム」（この書き方は主張者の表現）をあげたものの、まさにこのタイトルの本を読んで見たら、「価値論は捨てて『囚人のジレンマ』論でゆく、とあったので、「これはこれで問題だなあ」と、その意味では、「あとがき」も大幅に書き替えなくなくちゃ、と思ったことも、ご返事をすぐには書けなかった理由の一つです。

それともう一つ、原論の構成として、第一編を「流通論」として組み立てる宇野経済学にもその中途半端さをキチンと指摘しておかねば、などというふうに風呂敷が広がりかねない、という危惧もあります。生きているうちに、このスタンスから宇野経に注文をつけられるだろうか(彼らが納得しやすい形で)、そんなことにまで風呂敷を広げて命が保つのかという、心配も。

いまリビングでパソコンに向かっているので、腰を上げてわざわざ書斎の『資本論」を引っ張り出すのも億劫だから、うろ覚えで書きますが、マルクスも、すべての商品が完売されるわけではなく、「市場の胃の腑」というものがある、とさらり逃げている箇所がありましたね。これは、理論的にはまったく無用な弁解で、ことの最初に「ここでは商品はすべて売りつくされる」と仮定する、と述べておけばよかった。そういう舞台説明がないから、単純な投下労働価値説を信奉する学派が、「売れなかった商品にも価値はあったんだが『廃棄された』あるいは『実現されなかった』だけだ」と、マルクスを見当違いに弁護することになります。マルクスがふと漏らした「理論上の破綻」への不安に、きちんと立ち向かう姿勢ではありませんね。

市場の調節機能が行きついた先、「作られ、売りに出された商品はすべて売れる」という、いわば非現実的な市場が価値論の舞台ですなのですが、そこを曖昧に逃げているので、さきに述べた「売れなかった商品にも価値はあるのか」というわたしの素朴な疑問、というより、これからマルクス経済学を学んでみようかという読者ｊが、おそらく最初に抱く疑問であるはずで、

そこを強弁でごまかすと、「マル経はむずかしい」と以後敬遠されてしまうのは必定です。とくに今は、高校生でさえ公認の教科書でミクロ経済学の初歩（あの需要・供給曲線！）を学ぶ（学ばせられる）時代。時には「供給はそれ自らの需要を作り出す」という「セーの法則」なんかをかじってから大学に進み、ごくまれにマルクス経済学の講義を聴いても、最初から、あの価値論はすんなりと受け止められないでしょう。まして価値形態論においておや。

わたしは今、新聞を2紙、月刊誌を2誌、週刊誌を3誌購読していますが、その一つ、毎日新聞社の『エコノミスト』を愛読しています。この雑誌の性質上、最近はことに、新しい業種の創業者の苦心談などが読み応えがありますが、彼らが決まって口にするのが、具体物であれサービス商品であれ、「最初は全く売れず、説明も聞かずに玄関払いだった。靴を何足履きつぶしたかわからない」という苦節の日々の回顧です。「さいわい、何もかも設備を売り払って夜逃げせずに済んだから、今こうしてお話できるんですが」と笑うのが、決まったパターン。

唐突ですが、今ひょいと思い出したのが、ずっと昔見た、竹中直人主演の映画「無用の人」です。かれは、石ころだらけの河原に、よれよれのテント屋根の店を開いて、そこらじゅう転がっている石を拾ってきて売っているんですね。もちろん誰も買うわけはない。機械製品でもなく、時間をかけての農産物でもないけれど、とにかく「石を拾う」という労働の成果を市場（？）に提供しているわけです。ミクロ経済学なら、そんなやくざな商品販売者でも、とにかく「供給者」として扱う礼儀は尽くすはずですが、マル経ではすげなく門前払いでしょうね。

横道にそれましたが、わたしの今のはかない、究極の望みは「価値論からではなく、価格論に徹して「剰余価格」つまり「労働の搾取」を説明するマル経学者が出てこないかというものです。あの覚え書きの最後で、「アナリティカル・マルキシズム」（彼らの自称のまま）ではないが…」と書きましたが、よく読むと、彼ら（あるいはその日本分派）は、「価値論のかわりに『囚人のジレンマ理論』でゆく」とあったので、「こりゃ駄目だ」とあきらめました。もう出典は忘れましたが、いつか、『資本論』にも一家言あるサミュエルソンが「マルクスはベースでは価格論だが、最終原稿で、「価格を消しゴムで消して価値と書き換えてる」とジョークを飛ばした、とか。

マル経の心臓部に当たる「剰余価値→労働搾取」論も、価格ベースで何の支障もないはずです。「剰余から資本家が労働者に支払うべき『正当な労働の価格』を支払わない」から「搾取」なので、『正当な労働の価格』つまり夫婦＋二人の子供の生活費と、教育費（労働者自身の研修費プラス子供の教育費）を「剰余」の中から「正当に」支払えばよし。支払わないから「搾取」となるので、「剰余は労働者が作ったのだから全額寄越せ」というのでは、いわゆる「全労働収益論」になってしまう。ラサールはこれで人気取りをしたけど、マルクスは「機能資本家」への適度な報酬まで不当だ、とは言っていないでしょ。宇野理論じゃないが、それで理論上、資

本主義は丸く納まる、というわけですね。マルクスでも、理論上は、「労働力の価値どおりに支払われない」」というケースで「階級闘争」を論ずるのですからね。

それでまた話が飛ぶけれど、『エコノミスト」のある論説で、アメリカの何とかいう社会学者の説で、「現代の貧困層は、大局的に見れば、むしろ保守化している。それは「セレブ」という存在が実像を越えてさえクローズアップされているからだ。特定の個人が並はずれた資質と偶然のチャンスを得て、目もくらむような収入を得ても嫉妬しない。たとえば大リーグの選手や映画俳優や。「自分には彼らのような才能がない」ということに納得してしまうからだ」というわけだ。日本で言えば、ヤンキースの松井が、日給にすると一日 630 万円稼ぐとしても、庶民は誰も「けしからん」と怒らないように。大株主の収入は想像できないけれど、庶民の出身であるセレブの収入は、日々の新聞やテレビでこと細かに報道されるから、でもある、だいたいこんな趣旨でしたね 1 。なんか納得させられてしまって悲しくもありますが、それはそれとして、「労働者は搾取されている」という論理は、価格ベースで説明した方が共感を得やすいのではないか、とも思います。価値ベースだと、勢いで「全労働収益論」に傾きやすいような気がしますが、どうでしょうか。」

望月清司の生涯最後の論稿となる「価値形態論の上着は 30 万円」は、結局のところマルクスの『資本論』価値形態論は成り立たないということを論じているものだ。私はこの論文の掲載された専修大学社会科学研究所月報（2018 年 10 月号）の編集後記に次のように要約をしている。

「この御論文の主要論点は、そもそも『資本論』冒頭の価値形態論は成り立つのか、という大胆な疑問の提示から始まる。まず第一形態「20 エルレのリンネル＝一着の上着」にしてから、両辺ともにどんな品質かよく分からない面妖なシロモノであることのみならず、相対的価値形態の側（リンネル）は、等価形態側（上着）を自分の価値と同等な価値の相手を選んでいる「出来レース」ではないか。さらに第二・第三形態で登場する茶とコーヒーは、一定の生産・交換ゲマインヴェーゼン外部からもたらされた、終身束縛的労働や奴隷労働の所産であって、そもそも価値比較の等式に登場する資格がない。では第三・第四形態における「金」はどうか。「新産金は、それに投下された労働時間とはぜんぜん無関係に、地球の上にたまった金累積から決まってくる現在金価格からコミッションを引いて買い取られるほかない」（本文引用）モノで、そもそも価値形態論の論理的帰結として金貨幣を登場させるべきではなかった。これが歴史家でもある先生の結論でもあった。」（24 頁）

こう書きながら、しかしそれでは投下労働価値説までも揺らぎはしないか。もし価格論で資本主義における「搾取」を論じるとすると、プルードンのように「正義による交換」を語るか、

ベルンシュタインのように、搾取は太古の昔からあったのだから価値論はなくても、現代の搾取は論じられるから、価値論は棚上げして、社会主義的倫理を持ち出すのか、ということになりはしないか。価値形態論や投下労働価値説を省略した場合、「労働と所有の同一性」と「等価交換関係＝市民社会的関係」を論じる論理の系はどうなるのか、実はその疑問を提起したのは、大学院時代を望月の下でともに過ごし、職場でも同僚だった元専修大学経済学部教授の石塚良次氏であった。私としてもその点が大いに気になった。そのことを尋ねると 2020 年 7 月 8 日次のようなメールが返ってきた。

「問題は、ある商品＝労働の交換について、「投下労働時間」を双方が認識できないのは困る、という大兄の、そしてほとんどの旧マル経学徒の心配にあるんだが、ぼくに限らず、歴史時間を常に意識している人間は、そうは考えないのだ。

『投下労働時間が同じだから等価交換が成り立つ』といえば、大多数のマル経学徒の好餌になるが、その心配は無用と思う。『交換が（ぐじゅぐじゅした交渉の結果ようやく）成り立ってから、“事後的に”投下労働時間の当否＝損得感がわかる。長い時間をかけて、双方が『それじゃやだよ』という交渉の結果決まって行くのだ。それも、歴史的には『一時的に』。

A と B の交換を、隣で C と D がじっと見てるんだ。「労働と所有の同一性」は、実は「A と B の、Y と Z との長ーい時間の末にぼんやり決まって来るんで、無時間＝無歴史的、さらに言えば無人的認識は、そもそも非現実的なのだ。

つまり、投下労働時間の当否は、A と B との、言い替えればリンネル生産者と上着縫製者との一時的=当座的談合で決まるんじゃない。それなのに、マルクスがのっけから、『同一労働時間の産物と前提する』と言うから、『そりゃないよ』と言わざるを得ない。上着生産者は自分で羊毛刈りから始めるのかい、という文句だ。

行きがかりで長くなっちゃったけれど、究極の目的は、あの「30 万円」のおしまいの所での「先生、〜」という学生の質問に、まじめに、しかも誰に了解してもらえるような『マル経入門』だ。とにかく、最初の数ページだけで、「何だ、こりゃ」と閉じられてしまわない価値論だ。まだ自分でもスッキリ明答はできないけれど（できたら、こんな苦労はしない）、エンゲルスが（多分、ためらいながら）近代以前にはほぼ価値どおりの交換が行われていた」とマルクスを遠距離援護射撃したのは、ぼくとほぼ同じの疑問を払拭できなかったからだろう、と推測している。

価値形態論は、というより「マルクスの・『資本論』冒頭の価値形態論」は、究極、「金」が最終貨幣なのだ、ということを論証したかったのだから（そして大失敗しているのだから）、「30 万円」で書いたように『人類史説でいいじゃないか』と自己了解しています。」

望月によれば、等労働量交換は、無数の、また長時間の交換によって事後的に確認できるということだろう。望月の生涯最後の論稿となる「価値形態論の上着は 30 万円」は、この論文の末尾に次のような一読するとなぞかけのような短いあとがきを付記していた。

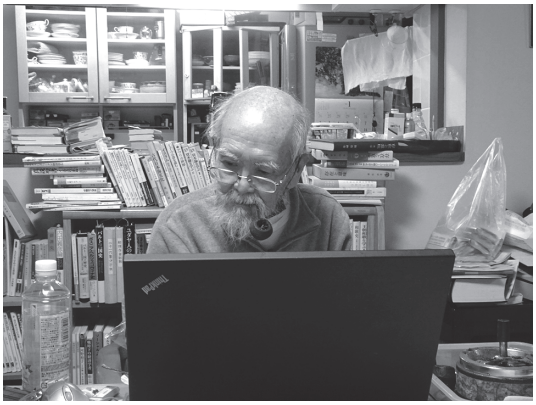
「原稿に改めて手を入れつつ、数十年前にある所で吐露した苦渋を思い出した。「高島善也氏のご指摘によれば、『市民社会を固有に分析する資本論第一巻第三章』までにさえ、私の眼はとどいていない」(『マルクス歴史理論の研究』1973 年、岩波書店) と。その「届かなかった」わけを、紙幅に恵まれた今、自虐同然に吐露することで、ようやく肩の重荷をおろす。が、しのぶることの弱りもぞする。公表をためらう肩を静かに押して下さった上、公刊までの俗務を担って下さった村上俊介教授、紙幅を割いていただいた専修大学社会科学研究所に深く感謝する」 (22 頁)。

この「が、しのぶることの弱りもぞする」の一句は、校正の最後の最後に付け加えられたたものだった。『月報』が公刊される直前の 2018 年 10 月 8 日のメールで、望月はこの一句について次のような説明をしていた。この一句は、藤原定家のよく知られた歌「玉の緒よ　たへなばたへね　ながらへば　しのぶることの弱りもぞする」からのもの。「しのぶること」とは式氏内親王への定家の恋慕の情と言われているらしい。望月は言う、「命よどうせ絶えるなら早く絶えて。これいじょう長生きすると、忍んできた恋も我慢できず誰かに漏らしてしまうかも知れないから、という意味です。「忍んできた恋」を「マルクス批判」と呼んで下さい。老来、この戯文を継続的に綴るうち、ときどきですが、フッと口にのぼってくるのです。してはいけないことをしているんではないかという「罪障の意識」です。…わかる人にはわかってもらえる、分からずに嗤うひとには嗤わせておく。書かずに済まそうという「忍ぶる心」が弱ってきた証拠ですね。」

振り返ると、望月『マルクス歴史理論の研究』の分析対象はマルクス『経済学批判要綱』が中心だった。その後、望月は『資本論』の「原始的蓄積」論の研究にまで及んだものの、固有に『資本論』における市民社会論分析をおこなわなかった。『要綱』のみならず『資本論』を中心に望月の関心に沿った語句とそれを含む文章を 789 枚のカードに保存していたにもかかわらず、である。『資本論』分析に進むには、まずはその入り口の価値形態論を批判するところから始めなければならず、それをはばかる気持ちがあったのではないか。2009 年、私に預けられたこの論文は、当初「公表しない」ことを前提としていた。書いたが発表しないというその矛盾する気持ちは上記のようなことだったと推測する。マルクスを批判することへの重い「罪障の意識」。私にはそんなものはないが、望月清司世代の持つ特有の意識であったにちがいない。私はそれを無理矢理表に引っ張り出した。

『社研月報』論文「価値形態論の上着は 30 万円」が出来上がる直前の 2018 年 10 月 11 日、

望月からメールが来た。「「ああ、やっと！」という複雑な思いで、最終稿 PDF を一行々々、まるで自分以外の誰かが書いた文章のように、何度も何度も読み返しました。勝手なことばかり言い重ねた旧メールを思い返しながら。「とにかくご論文をお送り下さい」という大兄のメールは、この 6 月 17 日でしたね。なんと密度の濃い 4 ヶ月だったことか。…「が、しのぶることの弱りもぞする」の深意を、大兄がいつかどこかで明らかにしてくれる、とのこと。嬉しくそのメールを目に焼き付けました」。



晩年の望月（2022 年 5 月）

ことはこの望月最後の論稿に限るものではない。望月は、「教義体系」のみならず、マルクスにも批判を加えながら、しかしマルクスに依拠した自らの歴史観をもとに、独自の市民社会論を展開してきた。だがその「深意」を明瞭に描き出すことを抑制することが多かったように思える。この論稿が、それら「しのぶること」の深意を多少なりとも明らかにできていれば、「約束」を少しは果せたことになるのだが。

この 2018 年から 19 年にかけて、すなわち望月 89 歳から 90 歳にかけて、旺盛な研究意欲は衰えず、自らこれまでの論文を選んだ「論文選」を編集し始めた。それが 2019 年 10 月 20 日刊行の『望月清司論文選　ドイツ史・マルクス・第三世界』（日本評論社）である（村上俊介「書評『望月清司論文選　ドイツ史・マルクス・第三世界』」（「専修大学社会科学研究所月報」683 号、2020.5.20.）も参照願いたい）。

しかし上記『論文選』刊行直前の 2019 年 9 月、脳幹橋（きょう）部右側の軽い脳梗塞で入院し、2 ヶ月後に退院。左脚に少し力が入らなくなった程度で、親族をはじめとして医療、薬剤、諸事の公的サポートも受けながら、自宅での生活が続いた。その間も、私は定期的に自宅を訪問し、また頻繁なメールのやりとりを続けていたが、望月の思考力は一切衰えることはなかった。

2022 年 10 月以降、体調不良で入退院を繰り返し、2023 年 2 月 1 日他界。

2011 年 5 月 19 日、先生と私は清華大と南京大を巡り、成田空港に戻ってきた。われわれは喫煙室に向かい、私の方が先にそこを出た。翌日、先生からメールが来た。先生は私の後ろ姿を見送りつつ、取り残された子供のような気持ちになり、もう一本たばこをくゆらせながら「1

分 50 秒ごとに順々に飛び立って行く飛行機の航跡を」目で追っておられたとのことだった。先生、今、私はあのときの先生と同じ気持ちです。にもかかわらず、私はそれを先生にお伝えすることができません。